

ブランを愛でたい！！だけのおはなし

むーたいりく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雪が降りしきり、一年中雪に囮まれる雪国『ルウイー』

そしてルウイーを治める守護女神ブランとブランの秘書である青年、細氷ハク。その二人をはじめとした者達の努力によつて雪国ルウイーは安定を保つていた

密かにハクに想いを寄せるブランと鈍感男のハクによつて織りなされる純愛ストーリー・・・なんて無かつた!?

ゲームギョウ界総選挙1位のブランがブラン大好き人間のハクによつて振り回されたり、やつぱり振り回されたりする日常

そんな二人の純愛ストーリーもとい、純愛ストーリー(笑)の物語

はたしてこんな思いつき小説はちゃんとまとまるのか・・・。それには俺にもわからん b yう p 主

ツンデレあり、幼女あり、お約束展開ありのお話。あまり気負いせずには気軽にどうぞ!

目 次

オリ主解説+α										
寝起きイベントは恋愛物語系の定石です										
透明人間は男のロマン										
眠れない夜は・・・										
最も簡単で早く、確実に風邪を治せる方法										
バレンタイン企画 前編 波乱過ぎて明ける幕は何処へ・・・										
30										
バレンタイン企画 中編 ゲームでも何でも最終目標を設定している時が一番楽しい										
37										
バレンタイン企画 後編 甘いのはチョコが故?それとも・・・										
45										
バドミントンをバドつて略すと一部の人にはしか通じないよね										
53										
ホワイトデー企画 上げといて落としてもつかいあげる、もう高低差で耳鳴りが										
63										
消したい過去・・・										
謎の手紙										
コラボ企画番外編「俺も超一流秘書になりたかつた」										
「過去編」「反女神組織『フエンリル』										
クリスマス（に出す予定だつた）企画「プレゼントはサプライズより一緒に買いに行く派ですか										
84	80	76	72							

オリ主解説+α

○オリ主解説

細水ハク（20）

ルウイーで暮らす青年、基本一人称は『俺』。明るい金色の髪に青色の目で所謂金髪碧眼

書類仕事など女神の仕事を女神候補生の口ムとラムに変わつてこなす。役職は守護女神であるブランの専属秘書という事になつており、教祖であるミナなどとおなじく協会に住み込みで働いている

自他共に認めるブランファンであり、この事実は自身も口外しておりブラン本人はおろか他国の女神たちにも呆れられるほど。やつている事はハクが秘書という地位にいなかつたら逮捕されそうな事もおおく、たびたびブランから指導（物理）を受けている

また子どもに好かれやすく、本人も子どもが好きなため女神候補生の口ムには「ハクお兄ちゃん」と慕われておりよく二人のめんどうを見たりしている

ネブテユースいわく『残念なイケメン』で整つた容姿もその性格のせいで薄まつてしまつていて……だが各国の協会関係者以外の人間にはこの性格やらがそこまで広まつておらず人気が高い。ちなみにその容姿を活用しルウイー協会の顔役をしていたりする

仕事は出来る方で書類仕事やクエスト関係の仕事も難なくこなす

所謂、完璧人間。性格だけが難点だが……

強さも相当で女神化前の女神たちなら勝てるが女神化されてしまうとさすがに厳しい

武器は主にリボルバータイプのハンドガンを扱う、時には二丁拳銃として使う時もある。魔法もホワイトスターほどではないが氷関係の魔法を使える

若くして両親を亡くし、兄弟などもいない為、近しい血縁者がおらず家族というものにあこがれている節がある。ブランに対する感情もそれから来る所も多い

○その他設定

時系列は超次元ゲームネプテューヌ THE ANIMATION Nから半年ぐらい。

プラネテューヌ、ラステイション、ルゥイー、リーンボックスの四カ国友好条約は既に破棄された後だが関係は以前よりもより友好的になつたと言えるだろう。模擬戦もとい女神同士の戦闘は今でもあるが、昔のようなシェアの奪い合いという事態は起こっていない。

女神候補生のいる他の二国のプラネテューヌ、ラステイションにくらべ口、ラムがまだ幼くまだ十分に仕事がこなせない為にハクを秘書としてプランの補助に回している

プランとしてもハクの存在はありがたく、感謝してはいるのだがハクの性格上素直になれていない節がある。（こういうところもハクが女神たちに残念なイケメンといわれている所以）二人のやり取りは女神たちから見るとただイチャイチャしているようにしか見えないらしい

寝起きイベントは恋愛物語系の定石です

——コンコン

硬い物に何かがあたる音が聞こえる

静寂の中の音に意識を睡眠という名の水面上に浮上を試みるがどうやら睡魔はこれを認めてはくれないらしい

私は再び意識を深く沈めていく

「おーい——、入るぞー？」

叩かれる音だけでなく人の声も聞こえる・・・

だが沈み始めたものを再び浮上させるにはただ浮上させる時とは比べ物にならないほどの力が必要なのだ

「——、起きろ——ン」

どうやら私を起こしに来たようだ沈んだ意識はなかなか戻つてきてくれない

ごめんなさい。と言おうするが声は出ず、ほんの僅かに口元が動くだけになってしまふ

このまま眠つてしまう事にわずかの罪悪感が残るがこの睡魔には打ち勝てず、意識は深く深く沈んでいく

「もう、しようがないか♪」

(・・・?)

もう半分以上動いていないかもしない脳が謎の違和感を知らせる

やけに声が嬉しそうじゃないか？それに何故か背中の方がわずかにあたたかくなつたような・・・

私はその違和感に意識を半ば無理やりに引き上げ、寝返りを打つてから薄く目を開く

やはりそこまで大きく目は開けられず、ぼんやりとしか視界が確保できない

徐々に視界がはつきりとしていき、目の前に合つたのは・・・

「・・・っ!?」

・・・よく知った奴の顔だつた

「な、な、何してやがんだ!!ハク!」

「ん?あ、起きたのか。おはよー」

顔を真っ赤にして声をあげるブランに対し、ハクは何という事は無いかのよう朝の挨拶を言つている

「おはよー。じゃねえ!朝っぱらから何してくれてんだ!!」

まるで変身後のような口調になつてゐるだがそんな事は気にしていられない

「何つてブランのかわいい寝顔を堪能してただけだ」

「・・・」

どうやら当の本人には後悔の念はおろか反省の色は見えておらず、起ころる氣も起きないが一つだけ決めた事がある

ブランの身体はひかりだし栗色だった髪はきれいな水色に、その瞳は澄んだ青色から対称的に血走ったような赤色へと変わつていた
ブラン達、守護女神の能力を持つた者にのみ許された力『女神化』
「え、えと・・・ブラン?い、一体何を・・・」

早くもハクはこの状況を理解したようで戸惑いを見せるが女神化を済ませたブランは何も答えず右手をのばすと自分の背丈以上ありそうなハンマーを召喚する

「ブ、ブラン?ブラン様?あなたは女神ですが わ、私は人間でして・・・あの、その状態では流石に私の命がですね?」

急に態度を変えたようにしゃべつているがどうにも私にはよく聞こえない

私はハンマーを振り上げるとハクに言葉をかける

「確かに人間を守るのは女神の使命だが部下の教育は上司の大重要な義務だからなあ?」

「ちよ、ま!」

「反省しやがれえええ!!

「ぎやあああああああ!!」

その朝は協会中に謎の爆発音と悲鳴が響き渡つたらしい・・・

透明人間は男のロマン

「はあっ!!」

振り上げたハンマーを目の前のモンスターに振り落とす
見ての通り私はいまクエストに来ている

女神としての大変な仕事であるからやっている訳なのだが、ちょっと
と別の理由もあつたり・・・

重量のあるハンマーと地面に挟まれたモンスターは絶命の音と共に
飛散し消えて行つた

そのもう一つの理由はハクのせいだ

朝にあんなことがあつたせいかあいつの顔が妙にちらつく
『何つてブランのかわいい寝顔を堪能してただけだ』

こんな風に集中していないとあいつの事が脳裏に浮かぶ、それが腹
立たしい

「うつ・・・・」

いつているそばからこんな風にまたあいつの事を考えている

顔をあげて周囲を確認するがそばには何の影もない、そこまで倒し
たという気はしていなかつたがいつの間にか全滅させていたらしい
「・・・助けていただいてありがとうございます」

「お前は・・・?」

不意に後ろから声をかけられる。ここだけの話、モンスターを相手
にしていたとはいえこの人間の気配を感知出来ていなかつたため
少々驚いていた

黒っぽいような紫色のローブを纏い、それと同色のハットをかぶつ
ている女性。アニメやゲームに出て来るとすれば魔女のイメージが
ぴつたりくる

「モンスターに出くわしてしまつたところを助けていただいたもので
す、助かりました。何かお礼を・・・・」

「いや、気にすんな。人間を守るのが私たち女神の仕事だ」

「そうですか・・・ではたいしたものではありませんが、こちらをお納
めください。せめてもの気持ちですよ」

「これ？」

ブランは謎の女性から渡された物を見る。小さい小瓶で中には何かの薬だろうか、錠剤状の物がいくつか入っているようだ。ラベルなどは一切なく、市販されているような物で無いというのはなんとなくわかつた

「なんだ、こ・・・」

これは。と言おうとしたがその時には既に謎の女性はおらず、辺りを雪に囲まれており立ち去つたなら残つているはずの足跡すら残つていない

「・・・消えた?」

結局どうしようもなく、取りあえず教会へ戻る事にした

一体どうしたものか・・・

ブランは一人、自室に戻り先ほど受け取つてしまつた小瓶を眺めていた

一応、中身を一つ取り出し眺めているが特に何も分からなかつたこんな不得体の知れないものをそこに置いていく訳にもいかず、持つて帰つたもののどうしたらいいものやら・・・

正直言つてこの教会にはロムやラムが居るのでこんな怪しい物、彼女たちには知られたくない

なんだかこんなことをしているととても悪い事をしているような罪悪感に襲われるがしようがない

この部屋に隠しておこうと立ち上がつた時に不意に声をかけられた

「ブラン様、いらっしゃいますか?」
「わっ、とど

「ブラン様? 大丈夫ですか?」
「え、ええ問題ないわ。どうかしたの?」

ドアからミナの声が急に聞こえ、思わず小瓶を落としそうになつたがなんとか両手でキヤツチし、事なきを得た

「はい、書類の方はどうですか? 終わつていれば回収致しますが」

「ああこれ、大丈夫もう終わってる」

「そうですか、お疲れ様です。これはお預かりしますね。それでは失礼します」

ミナは書類を受け取ると部屋を後にした

別に悪い事をしている訳ではないのに思わず隠してしまったがまあいいかという事で机の上ののみかけだつた飲み物を飲みほし、趣味の同人誌を書く為に横に置いてあつたノートパソコンの電源ボタンを押す

椅子に腰をおろしてから小瓶をしまうのを忘れていた事に気付き、立ち上がる

(どこがいいかしら)

隠す場所をあちこち考えながら部屋を歩き回るが、結局机の引き出しが一番だろうと思い、もう一度机に向かう・・・途中で違和感を感じた

「あれ・・・？」

・・・今、鏡になにもうつらなかつたような

もう一度、行動を巻き戻し鏡の前に立つて絶句する
「うつつて・・・ない・・・？」

首を動かし自分の身体を見るも何も見えない

どうして?と思い、考えると一つの結論にたどり着いた

(あの薬!!)

右手に持っていた小瓶の中身を机の上に全部出すと中から一枚の白い紙が入っていた

「身体・・・透明化剤・・・？」

身体透明化剤と書かれたこの紙にはこの薬の効果を説明していた『・・・。この効果は1時間ほどもちます、適切な量を守りお使いください』

(でも、これをどこで?そもそもものんでないし・・・!!)

ここまで考えを巡らせた結果、一つの事に気が付いた
「あの手に持っていたやつは・・・」

ミナが入ってくる前に眺めていた一粒の錠剤が無くなっている事

に気付き周囲を見渡すが見当たらない

私は記憶を思い返し、さつきの風景を必死に思い出す

(あれを眺めてて、ミナが入ってきたのに驚いて・・・あ・・・)

頭に浮かんだのは両手で小瓶を掴んだ映像。両手でつかんだ・・・つまり先ほどまで右手でもつていた錠剤は・・・

机の上のコップの中を見る、飲み干され空になつたカップの底に白い粉が固まつたような跡が少し残つているのが見える

(これだ・・・)

プランはこれからの一時間にため息をついた

――30分後・・・

・・・面倒だ。当然といえば当然なのだが声は相手に伝わる、しかし姿が見えない為、誰かと話す訳にもいかず、一時間というのはここまで長いものかと痛感していた

あの瓶に入つていた紙をよく読むと本来は服用から効果が出るまではタイムラグが発生するらしいのだが飲み物に溶けてしまつた為に効果が瞬時に働いたらしい

ここまで30分さえ大変だった・・・

取りあえず自室にいればと思い、立ち上がつたノートパソコンでの原稿をつくつていればその音で中に私が居ると思ったのかラム達が来たりした

その後でミナも來たがさすがに誰もいない事になつていてる部屋から私の声だけが聞こえているとなれば大変な事になるので仕方なく居留守を使つたりと普段より気を張る事が多い

だからと言つて自室の外に出ればまるで私に吸い寄せられるかのように教会職員とぶつかつた

普段はあつちが私に道を譲つて いる為か廊下を歩く事もいつもよりかは大変だつた

マンガなどでは透明人間というのがいかにも便利な能力として出てくるが実際になつてみるとそうでもないらしい

効果持続はようやく半分を切り、そろそろ解けるときの事を考えな

くてはならない

今は一応自室にいるがここではちょうどという時人が入つてくる可能性がゼロではない

確かに可能性は低いかもしないが万が一があつては困る。ここより可能性が低い所・・・ブランは考えを巡らせた結果・・・閃いた!!

(そこだ!)

四方を壁に覆われ、唯一ある窓もしまつてている状態では中からも外から見えないタイプのもの。ここへと入るドアも一つだけ、強いて言うならば窓と同じスマートガラス・・・完璧だ

ブランが現在いるのはつまり浴室だった

構造上、外部から見られる心配はない。それに加えここは教会の中でも私たちの生活フロアの方にある為、教会職員はここに近づく事すらない

たとえブランのようにここに住んでいる者だつたとしてもドアの向こうの脱衣所まで来ることはあるかもしれないが時間は正午まであと少しといつたところ、ここへは来る理由がない

同じような理由でトイレも考えたが解ける時間が曖昧な現段階では長居してしまう可能性もある為こつちを選んだ

時間も一時間まであと20分弱といったところ、多少切れるのが早まつた時でもこれなら対応できるだろう

まさに完璧としか言えない布陣だ・・・

――だがブランは知らなかつた。立ち過ぎたフラグは思いもよらない展開を引き寄せるのだという事を・・・

ガチャヤツ

ドアを開く音にブランは思わず身体をビクツとさせる。誰かが入つてきたようだ、開始早々ブランの作戦が破られたたがそんな事で詰むほどブランの戦略は単純ではない

入つてきたのは脱衣所であり、今自分がいるのはその先の浴室だ。

おそらくミナが洗濯物か何か取りに来たのだろう

「ふう、つかれた」

(?)

思わず声を出しそうになり慌てて両手で自分の口をふさぐ
(ハク!?)どうして?今はたしかクエストに・・・!!)

ブランは改めて時間を確認する。ハクが出かけたのは自分とほぼ同じ時間、自分はクエストを終わらせ、帰つて来てからここに隠れるまで最低でも一時間はたつている。そんなに時間があればハクが返つても何ら不思議は無い。それどころか今クエストから戻つたという事は・・・

脱衣所の方からボタンをはずす音が聞こえて来る

(・・・・・)

顔の温度がどんどんと上昇してくるのが分かる

生憎今、鏡を見ても何も映らないがもし見えていたら顔がすごく真っ赤になつていることだろう

(ど、ど、どうする!・・・・)

ブランは見えないからだで慌てふためく。もう少しでハクが・・・
ハクが裸でこつち来てしまう!!

ガラガラ・・・

そうしている間にドアは開かれ、ハクが入つてくる

ブランは何も見ないようにと後ろを向き、必死に息を殺していた。

正直言つて心臓の音でばれないかひやひやしている

そんな事も知らずハクは閉まっていた窓を開け、シャワーで身体の汗を流していた

ブランはとすると・・・どうしようもない状況に悶え苦しんでいた後ろを向いているとはいえた密室に一人、何の拍子にハクを見てしまうかわからない。だからと言つて目を堅く閉じれば執筆活動で培われた想像力が一層と掻き立てられるという生き地獄・・・

もうどうにかなつてしまいそうだ・・・

自分にはただただ、はやく終われという切な願いを祈るばかりしか出来ない

だがそのまま終わる事は、神も貴君ら読者も許してくれない・・・
ガタつという音と共に突然の来訪者は窓からやつてきた

「ニヤー」

「ん？」

突然の鳴き声にそちらを見そうになつたが瞬時に今状況を思い出
し、首を振る

「お、にゃんこ」

どうやら鳴き声通り猫らしい、おそらく窓から来たのだろう

「ニヤ？」

(な!?ちよ、ちよつと)

私はとうとう運から見放されたのだろうか。その猫が私の方に近
づいて不思議そうに鳴く

思わずその猫の方を見る、目には見えていないようだが何かを感じ
取つてているように見える

動物は人間より視覚が優れていらない分他の機能が発達していると
聞いたことがある。いくら目に見えなくても猫の視覚以外がここに
いるはずの謎の物体を感じているのだろうか

「よつと捕まえた、お前も洗つて欲しいのか〜?」

見ていた猫がハクに捕まえられたことで視線が猫からハクへと
移ってしまう

ハクの見た目の細さに似合わず徹底的にいじめ抜かれた筋肉質の
体をプランの視界がとらえる

「ぶふつ!?

「え・・・? 猫つて以外と人間みたいな驚き方すんだな」

「ミヤー、ミヤー！」

「あ・・・」

プランは思わず噴き出しながら後ろに向き直る。幸いにもハクに
は噴き出した音は猫から聞こえたように感じられたみたいだ

お湯をかけられた猫はハクの手元を抜けだし、先ほど入ってきた窓
から出て行つたようだ

「あ〜でてつたか。まあいいや、取りあえず出るか」

ハクはそう言うと浴室のドアを開け浴室を後にする。出てつた瞬間、私は腰が抜けそうになるがなんとか耐え、浴槽の淵に腰掛ける

ふと鏡をみると薄くではあるがだんだんと自分が見えるようになってきていた。薬の効果も限界が近かつたようだ。全くギリギリというか・・・なんというか・・・

するとどこか安心してしまい、思わず倒れそうになる。思わず先に手をつくが着いた場所が悪かつた・・・

(あ・・・!!)

——カコーン

ちようど手をついた先に桶があり、手の反動で突き飛ばしてしまった。つくりよいようがないほど分かりやすい音が響き渡る

「ん? 誰かいるのか?」

脱衣所の方からハクの呟きが聞こえてきた

まずい・・・ハクはこちらに近づいてきているし、わたしはもうはつきりと視認できる程に戻つてきている

ブランにはもうどうする事も・・・いや、まだ・・・でも・・・この状況を打破できる名案が頭でうかんだのだが行いのに若干ためらいが生じる。だがハクはこちらへと歩いてきている・・・(もうどうこう言つてらんねえ!!)

ハクがドアに手をかける。ちようどその時・・・
「にや、にやあ・・・」

ブランは猫の鳴き前をするが緊張しそぎて変になつてしまつたかもしれないと思い、心臓の鼓動を一層速める

「あ、なんださつきのにやんこか」

ハクはそう言い残すと踵を翻し、こちらとは反対に歩いていき脱衣所から出て行つた

「・・・し、死ぬかと思つた」

あまりにも張りつめていた緊張の糸が緩みブランは思わず脱衣所に倒れ込んだ

そのあとドアの近くまで行くと、誰かとハクが話していたようでの話が終わつたのをみはからいその脱衣所を後にした

「ブラン？まだ朝の事怒つてたのか、俺が悪かつたからさ機嫌直してくれよ。な？」

「・・・知らない」

昼になつたのでテーブルに座つていたところ、やけにぐつたりとしたブランが現れた。どうしたのか聞いてみても何も答えてくれないどころか目も合わせてくれない

だからこうして謝つているのだがやはり顔を紅くするだけでまだ怒つているようだ

「けんかだめ・・・」

「うつ、悪かつたって。ブラン」

口ムにすら痛いところを突かれ、ただ謝るしかなかつたハクであつた・・・

――時間は少しさかのぼり、シャワーを浴びたハクが着替えを済ませたぐらいの時間・・・

ミナは洗い終わつた洗濯物を回収しようと脱衣所に向かつてゐた。すると向かいからハクが歩いて來ていた。

ミナはハクがシャワーを浴びに行つたのを知つてゐる為、特に何も不思議に思わず声をかける

「どうでしたか、ハクさん」

「あ、ミナさん、お陰様でさっぱりしましたよ。ありがとうございます」
た。さつき入つてる時に猫が入つてきたんで可愛がつてたら遅くなつちやつて、お昼急いで作りますね」

ハクさんはそう言うとキツチンの方に走つて行きました

「大丈夫ですよー、私も洗濯物回収してから行きますからー」

一応、声はかけたが果たして本人まで届いただろうか。いや届いても届かなくとも彼なら急ぐのだろうなど思い、脱衣所へ向かつた
最後の角を曲がると脱衣所のドアが急に開き、中から疲れた様子のブラン様が出てきた

私は思わず曲がり角に身を隠す、そのせいかブラン様は私には気付

かず部屋へと戻つて行つた

(え!? さつきまでハクさんが入つていたのにブラン様が出てきて、それになんかぐつたりしてて……なんか顔赤かつたかも。そう言えばさつきハクさんが『猫』可愛がつてつて遅くなつたとか言つて……まさか『猫』つてブラン様の事……)

「あ……」

ミナはたどり着いた答えに顔を真つ赤にする

バラバラだつたピースがミナの中で奇跡の繋がりを見せ、一つの絵が完成してしまつた瞬間だつた……

眠れない夜は・・・

「おねえちゃん、これ読んで」

ベッドの明かりのみに照らされ薄く明るい部屋に子どもらしい声が響く

「ええ」

口ムから渡された本を私は二人に読み聞かせる

ブランは両側を妹達にはさまれ共にベッドへと入つている。ブランは二人に子守唄代わりの絵本を読んでいる訳だ

一見したらありふれた仲のいい姉妹の光景かもしれない。しかしこの光景も少し前だつたら実行する事も難しかつた

理由は簡単。ここルウイーを治める女神としての仕事が忙しかつたからだ

特段、ルウイーの仕事が多いという訳ではない。ただ他の三国に比べ人員が不足してると言つた方がいいだろう

ゲイムギョウカイに存在する四国のうちリーンボックス以外の国には女神の他に女神候補生がいる

女神にとつて代わるほどの存在という訳にはいかないが女神候補生のバツクアップというのは各国にとつて今や不可欠なものになつているといつても過言ではない。とはいえ口ムやラムに重大な責任の伴う仕事を任せる事は出来ない

もちろんベルのように女神候補生なしでも立派に治める事もできなくはないが、あれはベルが人を摑む点や決断力等が並外れているからだ。正直あれで女神候補生まで付いていたらリーンボックスに勝てる国は無かつたんじやないかと思う

その分を教会職員で埋めればいいじゃないかと思うかもしれないが女神候補生には一般職員と異なつた能力や権利が存在する為、女神候補生の代わりという職員を探すという事は新たな教祖を・・いや、それ以上の逸材を探すことを意味している

今考えれば、このぎりぎりな運営がシェアを奪われる標的にされた理由なのかもしれない

そんな理由でブランは各国の女神達よりかは多忙であり、妹たちに割く時間があまり取れないでいた

でもそんな時転機が訪れた。細氷ハクの就任だ

ハクの能力は一般職員の時からひとつ飛びぬけていた

教祖にも追いつき、追い抜かんとするその手腕もすごいが何よりハクには女神という存在の存在意義が一番よくわかつている。正に女神候補生の代役にふさわしかつた

私の秘書に就任したあいっちは私たちの暮らしを変えた。単純に私の負担が減ったというのもあるがそれだけにはとどまらない、私やミナの仕事少したつころには教会全体の仕事効率が向上しているよう

に感じる事が出来る

あいっに支えられていると思うと少々、癪だが本心では分かっている。彼への感謝はもはや感謝状どころの話ではない、それ以上のものだ

「――。つてもう寝てるのね」

本を読み終わつた頃には既に二人は夢へと旅立つていた

子守歌代わりに本を読むというのは聞き手はいいが読み手は案外目が冴えてしまう

ベット横の机に置いてある時計を見ればその時刻はいよいよ深夜という時間帯に突入しようとしていた

「・・・んしょ」

このまま自室へと戻り、無理やり眠つてしまおうかとも考えたがおそらく上手くいかないであろう事は分かつていて、一度ダイニングで落ち着いてからにしようと思いつベットから静かに立ち去る

「・・・おやすみなさい」

ブランは音をなるべく立てないようにドアを閉めながらそう呟いた

それからダイニングへと向かい電気をつける。それからホットミルクをつくり椅子に腰かける

「ふう・・・」

さすがに時間が時間がだけあつてだれとも会わなかつた事に当然だ

といいながら頭のどこか寂しさを感じている自分が居た。この一年
ちよつとで色々な事があり過ぎて頭では理解しているつもりでもど
こかついていけない。そんな事をふと思い出す事がたまにあつ
た

長い間、敵対関係だつたこの四国が当時では考えられないほどに今
では友好関係を築いている。ここまで来る道のりは正に綱渡り、一步
でも踏み外せば奈落の底へと真っ逆さま・・・そんな緊張の中にいた
事を思すと今でも実はまだ綱渡りの最中なんではないのかと急な不
安に襲われる事があるので

ブランの頬には自分でも気付かないうちに一筋の涙が通つてい
た・・・

「はあ、疲れたー」

明かりが消え、真っ暗となつた廊下にハクが疲れた様子で歩いてい
た

仕事が思いのほか長引いてしまい、帰つて来てからお風呂から出で
くるときにはもうすぐ日付が変わりそうな時間だつた

もし子どもだつたらまさしくトイレに行けなくなる廊下だがさす
がにこの年になつてまで言つてては笑い話にもならない

(ベ、別に怖いのを『まかすために無理やりしゃべつてる訳ではない
からな!!』)

一体誰に向けての牽制なのだろうか・・・

こんなコントを脳内で行いながら自室へと向かつていた
「ん?」

その途中、長い廊下の一部からわずかに明るいのに気付く

「・・・誰かいるのか?」

セキユリティは万全ではあるものの万が一を考え、足音を抑え明か
りのついている部屋へと近づいていく
「ブラン・・・?」

「え・・・」

そこには一人でテーブルに腰掛けているブランだつた

「どうしたんだ!?」

ハクはブランの元へ駆けよる

真つ暗の中長い廊下を歩いて来ていたハクの目であれば多少暗い中でもブランの頬に涙の痕があつた事を見つけるのは容易だつた

「ハク・・・」

「なんかあつたのか?」

ブランはハクの問いに首を振つて否定する

何も無くに涙を流す訳がない、だが本人が何もないという。一体どうしたものかと思い、取りあえずブランの隣に座つた

ハクが座つた所でブランが口を開いた

「ねえ、この世界は平和になつたと言えるのかしら・・・」

「・・・平和か」

平和という言葉はハクの心に深く響いた

4力国の協力体制がようやく敷かれた今、昔と比べたらずいぶんと平和になつた。だがもちろん全ての争いが消えたわけではない

「何が平和なのか、それがわからない・・・」

これはブランの叫びだつた。自分の感情を押し殺し、ひたすら國のため働く普段のブランでは見せない本当の姿だつた

ブランはすぐるような目でハクを見つめる。自分のたどり着く先はどこなのか、いつたどり着けるのか・・・その答えを求めている
ハクもそれは分かつていた。ここでハクが答えを与えるのは簡単だ、嘘でも誠でもいい何かしらの答えを説けばいい・・・

・・・・・でも

淡い光に照られた部屋の中でハクは無言のまま、ブランを抱きしめた

「！」

突然の事にブランは驚き、顔を赤面させる

「・・・ごめん、それは俺にも分からぬ」

「・・・」

「俺も何が平和でどうすれば平和つて言えるのか、それは分からぬ。でもこれだけは言える事がある」

「え？」

ハクもブランには正直でいたいと思っている。だからこそありもしない言葉で励ます事はしたくなかった。だが言えることはあつた「俺たちは必ず平和に向かっている」

「平和に・・・向かつてる？」

「ああ、今が平和かは分からぬだけど俺たちのしてる事は平和への道であることは確かだ」

「でも、それじやいつまでたっても・・・」

「近道だけが道じやない。遠回りして周りをじっくり見たり、時には立ち止まつて今まで歩いて来た道を見返すのも必要だ。そうだろ？」
ハクは抱きしめていた腕を緩めブランの顔をしつかりとみる。顔を紅くしているブランに対し、ハクはいつも通りのいらずらっぽい笑顔を浮かべていた

それからブランとハクは今までの事をちょっと話していた。先ほどのハクの言葉を借りるのなら『立ち止まつて今までの道を見返すことをしていた

特別な事をしている訳ではない、だがハクとの会話は先ほどまでの凍りついた心を溶かしていくた

「ふあく、もうこんな時間か」

ハクはあくびをすると部屋の時計を見てそう呟く

ブランも時計を見ると日付は既に変わり、針は午前3時を指してい
る

「そろそろ、寝るか」

「そ、そうね・・・」

まだ一緒にいたいという気持ちに揺さぶられるがさすがにこれ以上は明日（既に今日だが）に影響を及ぼすと考え、ハクに同意の言葉を述べる

するとブランのわずかな表情の変化を見破ったのかハクが口を開いた

「それとも俺も一緒に寝てやろうか？」

ハクはにやにやとした表情を浮かべている

何の事はない、いつものからかいだ。ブランはわずかに赤面する、だがやられっぱなしではいられないのだ

「そ、そうしてもらおうかしら？」

虚を突かれたハクは驚いており反撃の意味では大成功なのだが…
(なにいってんだあ!!)

これはとんでもない自爆特攻だつたらしい

先ほどとは比べ物にならない程に顔が熱を帯びる、もし自分の顔を見れたらすごい事になつていそうだ

「いま……な、なんて？」

「なんでもねえ！なんもいってねえから!!」

ブランは首が取れるんじゃないかというほどにふる、あまりの恥ずかしさに素の口調に戻つているがそんな事を気にしている余裕などある訳がない

「そ、そう。まあ取りあえず寝よう」

「そうね！寝ましよう」

そう言つて二人はベッドへと向かう為、部屋の出口へと向かう。もちろん自分のベッドに…

出口をでてそれぞれの自室へと別れる

「じゃあ、おやすみ

「ええ、おやすみなさい」

「あ、ブラン？」

就寝のあいさつをし、自室へと歩みを進めようとした時、名前を呼ばれハクの方に振り向く

「あんまりそういう言う事言つてると……何するかわからんねえぞ？」

「なつ……」

「じゃ、おやすみ♪」

ハクはそれだけ言うと満足したように手をひらひらと振り、自室へと戻つて行つた

次の日の朝、ブランにははつきりとした隈ができていたのはまた別

のお話
・
・
・
・

最も簡単で早く、確実に風邪を治せる方法

「ゴホッ、ゴホゴホ・・・」

乾いた咳の音がさびしく部屋に響く

ここはブランの自室だ。日は完全に上り、普段であれば仕事に精を出している時間である

ピピピという音が自分の胸元から測定の完了を伝えて来る

身体から取り出し、表示されている数値を見ればそこには37.5°Cと表示されており、認めようとしない自分に変わり体調不良を訴えている

「はあ・・・」

熱を測る為に起こしていた身体はため息とともにベッドに吸い込まれていく

現在、ルウイーの守護女神ブランはダウン中だつた・・・

女神が風邪をひくのかと思われるかもしれないがここ最近、徹夜が続いてしまったのが災いしたらしい

徹夜とはいっても完全に趣味なので自業自得なので文句は言えないと

前ならこの程度で仕事を休むわけにはいかなかつたのだが今はハクやミナたちのおかげでまず直す事に専念出来ている

全くありがたい限りだ。あとはあの言動にさえ対応出来れば・・・色々考えていると頭痛がしてくるがこれも全てこの風邪のせいに違いない

先ほどミナが軽い食事と薬を持って来てくれたので後は安静にしていればいくらかはちがうだろう

薬が効いてきたのか次第に瞼が重くなる。当然咳やら頭痛やらで疲れていたブランがそれを拒むはずも無く、夢の世界へと旅立つた

「これで、最後つと」

その声と同時に放たれた弾丸は正確にモンスターに命中し、散り散りとなつて飛散していく

手慣れた様子で素早く弾薬を入れ替え、辺りを警戒するが先ほどの見立て通り辺りに追加のモンスターは見当たらない

息を大きく吐くと少し離れたところからおにいちゃんと自分を呼ぶ声が聞こえてくる

どうやらロムの方も終わっていたようだ。俺は手をあげてこちらの終了を伝える

「これでおわり？」

「うん、そうみたいだな。おつかれ」

「だめ、帰るまでがクエスト（ふるふる）」

労いの言葉をかければロムに油断を注意されてしまう、少し前であれば自分がロム達に言い聞かせていた事を今では自分が言われていた。知らない間にずいぶんと成長したものだ

「お、ちゃんと分かつてるなあ。さすが女神候補生！」

「えへへ（てれてれ）」

ロムは褒められたのが嬉しいのか満面の笑みを浮かべていた

今さらだが今日はハクとロムの二人でいくつかのクエストを請け負つていた。

ここにラムを加えた3人かブランも含めた4人で出ることは何回もあったが今日はブランが休みの為、その穴をラムが手伝い、クエストは二人で来たというわけだ

気が付けば日も傾き、時間は夕方と呼べる時間へと次第に近づいていつている

「じゃあ気を抜かずに帰るか」

ハクの言葉にロムはうんうんとうなづいた

その後は特に異常や緊急ことは無く無事ギルドへとたどり着き、クエストの報告と清算を行つていた

お疲れさまでしたと受付の言葉に挨拶を交わし、ロムを待たせていた席へと戻るとロムは座りながら夢の世界へと旅立つていた

「あら、寝ちゃつたか・・・」

起こそうとも考えたが気持ちよさに寝ている顔を見ていると悪いように思えたので仕方なくおぶつて帰る事にした

ルウイーは一年中寒いのでおぶつた上から上着を羽織る

「はあー」

吐く息が白い、ギルドの中も確かに寒かつたが外気に触れるとさすがに違う

露出した部分が痛く感じる。真冬の夜なので当たり前だが・・・
「おねえちゃん・・・」

教会へと背中から口ムの寝言が聞こえてきた
風邪で倒れた姉の代わりになろうといつも一緒のラムと離れてまでハクについてきたのだ

「・・・お?」

気付くと白い物体が目の前を落ちていく、空を見上げれば雪が降っていた。どおりで寒い訳だ

「これは早く帰んなきやな・・・」

ハクは小さくそう呟くとわずかに帰る足を速めた

「ただいま帰りましたー」

「おかえりなさい、雪の中大丈夫でしたか?」

教会に着き、自分の帰りを知らせればミナさんが出迎えてくれた
「はい、降つて来た時はそんな遠くなかったので」

「口ムちゃん、ハク、おかえりー」

「ラム、しー」

「あ、口ムちゃん寝てる」

奥からハクの声を聞いたラム駆けて来るが口ムを起こすのも氣の毒なのでラムに静かにするように伝える

よく見ればミナさんが食事をもつている

「何かの途中でしたか?」

「え? あ、はい。ブラン様に夕食をと思ったのですが・・・」

ミナさんの方も俺が自分の持っている物を見て言っているのだと分かったのかその用事を説明する

ミナとしてはブランに夕食を渡してから口ム達をと思っていたが
口ムが寝ていてはそういかなくなってしまった、とはいえたが起
すのも・・・といった具合だ

どうしようかと思つた時、ラムが声をあげた

「ミナちゃんの代わりにハクがお姉ちゃんにご飯をあげればいいじや
ない」

「あ、そうですね、帰つて来たばかりでいませんがお願ひします。口
ムは私が預かります、ではこれを」

「え? あ、ちよ・・・」

ミナは瞬く間に口ムを受け取り、気付けば代わりに手に乗つていた
のはブランの夕食だつた

「じゃあ、お願ひしますね」

「がんばってー」

「あ・・・」

ちよつと氣を取られていればミナさん達はどこかへといつてしまつた

何だろうか、このはめられた感は・・・

とはいえどうしようも無いのでブランの部屋へと足を運んだ

——コンコンコン

ドアをノックするが中から返事は無い。取りあえず中に入るが明
るい廊下との明暗さで目が慣れていない

徐々に目が慣れて行き、ドアを閉めた

中は真っ暗でベッド横の机にある照明がわずかに光を放つていて
程度だ

「すー、すー・・・」

ベッドにはブランが規則的な寝息を立てて、寝ている

そういうえばこの前もこんな事があつたなあと想いだすがその時の
結果も思い出し、苦笑いを浮かべる

夕食をベッド横の机に置き、俺は近くに椅子を置いて座る事にした
ブランの顔を眺める。初めてブランを見た時は無表情で感情がな

い、そんなイメージを抱いていたがそれもこの期間で180度変わつていった

表情豊かでこんなに人間っぽい奴もそうはない、それを女神という重責の為に押し殺して忙しい業務に飛び込んでいる

(そのありさまがこんななんじやな……)

ハクは苦しい表情を浮かべる

「風邪ぐらい俺にでもうつしてけよ。全く……」

ハクはその表情をいつもの表情に戻す

もうしばらくこの寝顔を眺めていたいがあまりやり過ぎると後が怖いので声をかける

「ブラン、ブラン、飯だぞ。起きろー」

「ん……」

ブランは小さく声をあげてから薄目を開け、身体を起こす

おでこに張つてあつた冷えぴたはそこで力尽き、ブランの掛けている布団に落ちる。ブランは周りを見渡しどうやら今の状況を理解しようとしているらしい

「おはよ、ブラン」

「……ハク、どうしてあなたが」

「ミナさんに頼まれて飯を届けに来たんだよ。……だからその怪しむような目をやめてくれ」

現状の理解は出来たようだがブランの目が辛い

「あなたには前科が大量にあるのよ……」

ブランの言葉になんの反論出来ない俺は苦笑いを浮かべるしか出来なかつた

ブランの頭に走る鈍痛は風邪によつて来るものだけではないのかもしれない

「と、取りあえず調子はどうだ、食欲あるか?」

「ええ、朝の時よりかはよくなつたわ」

「そうか、取りあえず電気つけるぞ?」

俺がそう聞くと頷いたのでへやの電気を点ける

ブランの言う通り、顔色は幾分かよくなつたようだ

ブランの顔を見ながら先ほど自分が置いたおかゆが目に入り、ハクの頭に何かが浮かんだ

「……どうかしたの？」

「いや? 何でもないよ」

顔に出ていたのがブランがあやしそうこちらを見てくる

「それよりおかゆ食べるだろ?」

「え、ええ。たべるけど……」

俺はベッドの横に置いた椅子に腰かけながらそう聞く。帰つてきた返事に思わず笑みがこぼれてしまふがぐつとこらえる

「じゃあ、はいあーん♪」

「……そう言う事かよ」

ハクはおかゆを掬うと笑顔のままそれをブランへと向ける

「看病といつたらやっぱこれでしょ」

「はあ、分かつたわよ。……あむ」

頬を赤く染めながらもブランは仕方なくそれを受け入れて食べる
だがそれをされたハクは茫然としていた

「……なに? あなたの望み通りにやつたけど」

「……ごめん、思ったよりかわいかつた……」

「つ、うるせえ!」

それからも幾度となくおかゆを取り上げようとしたがハクがそれを離す事はなかつた

——チ Yun 、チ Yunチ Yun

「……ん」

閉めたカーテンの隙間から入ってきた日差しが自らの覚醒を促す。

小鳥のさえずりが外から聞こえてくる……どうやら朝がきたらしい
昨日はあんなにも自分を離してくれなかつたベッド、今日は驚くほどすんなりを身体起こせる

「あー、あー」

声を出してみても喉に痛みは感じない、気付けば頭痛も消え去つて
いる

悔しいが昨日のハクの看病が効いたという事だろう

(お礼ぐらいは言つといた方がいいかもな)

今日は一応自分達は休みとなつてゐる。そろそろみんな起き始め
て来る頃だろう

ブランはベッドから出てダイニングへと向かつた

「あ、おねえちゃん元気になつたの？」

「もう、いいの？（おどおど）」

「ええ、昨日は頑張つてくれたみたいね。ロム、ラムありがとうございます」
自分のお礼の言葉に二人とも満面の笑顔を浮かべた

「ブラン様、もう大丈夫なのですか」

「ええ、もう大丈夫。心配掛けたわねミナ」

「いえ、たいしたことではありません」

さすが教祖だ、全く頼りになる

「・・・そういうえばハクはまだ起きてきてないの？」

いつもなら真っ先に来そうなハクの姿が見えない事に違和感を覚
えた

「そうなんですよ、いつもならもう来ていっていい時間なのですが・・・」

「いいわ、昨日はあいつにも世話になつたし、私がみてくるわ」

「はい、朝食は出来てゐるのでお願ひします」

ブランはダイニングをでて近い場所にあるハクの部屋へと向かう

ハクの部屋のドアをノックするが返事がない

ダイニングからは離れていないので入れ違いにはなつていないと
は思うのだが・・・

もしかしたらトイレに行つてゐるのかもしれないと思いそれを確
認する為中に入る

「ごほ、ごほ・・・」

「ハク？」

以外にもハクはまだベッドの中にいた。なんだろうこの既視感
は・・・

「ハクもう朝だけど・・・？」

「あ、ブラン。わか・・・ゴホゴホ・・・」

ハクは何かを言おうとしているがそれも咳に阻まれる。それに少

し鼻声っぽい感じが

「もしかして・・・」

「うつったな、完全に・・・」

「・・・悪いわね」

バレンタイン企画 前編 波乱過ぎて明ける幕は 何処へ・・・

——バレンタイン・デー

この日には人は歓喜し浮かれ世界が温かなムードに包まれる

始まりは愛に生き、無情にも処刑されてしまつた偉人を聖人として人生の参考にする日でそれが後々恋人たちが手紙や贈り物をおくつたことかららしい

バレンタインといえばチョコというのもそれに目を付けた菓子類企業がチョコレートと関連付けたのが始まりだ

だがこんな素晴らしい日にも残念ながら休みは無い・・・

「・・・というのが、今年の計画でございます」

スーツを着た社員が指示棒をたたみながらそう言い、こちらに向き直る

「うーん・・・なんかこうパツとしないわね」

「そ、そうですか・・・」

ノワールの批評に社員はうなだれる

ノワールのこのズバツという所は嫌いがじやないが、いくら女神達との商談を任せられる程の社員とはいえ女神からの批評にはさすがにくる物があるのだろう

今さらだがブラン含め各國の女神達は現在、商談の真っ最中だ
商談というのも年に一度、バレンタイン・デーに行われる催し物にするものだ

バレンタイン・デーにチョコを配るというのがこの催しで大手菓子企業と組むことや女神が全員集まることもあり一般国民だけでなくメディアの注目を集まる一大イベントだ

こちら側としては莫大なシェアの獲得、企業側としては自社の広告とお互いに相応の利益が得られる

「まあ、毎年やっているのですから仕方ないところもありますわ」

ベールのフォローが入る。社員も幾分かは力を取り戻したように見える

「とはいって、確かに来場者数が年々、低下傾向なんですね。どうにかしたいところではあるんですが……」

どうやらノワールの指摘は的確だつたらしく、企業側としてもこの問題は把握しているらしい

みて いるだけでは動員数の低下など感じなかつたが、そこを細かく把握している辺り流石は大手といつたところか

「そこで私たちから助言を仰ぎたい。ということね？」

「はい、企画はうちの担当なのですが……」

「気にしないでいいわ、私たちもただでシェアを得るつもりはないもの」

プランの言葉に社員はありとうござりますと頭を下げる

下げられてから言う事ではないかもしけないがこれはおもつたより難しい問題である事は変わりはない

この行事は毎年行われている人気行事だ、テレビ中継も大々的に行われ足を運べなくともその模様を見ることは出来る。だがそれ故に飽きられてしまえばそこまでだ、現に動員数の低下はこれが原因だと言つてもいいだろう

今年いけなくとも来年行けば……いかなくともテレビだけで……といった具合に今年は絶対に行きたいという何かが足りないのだろう

う

「どうしたものかしらね」

「あまり大きく変えては反発を生みかねないわ」

ガラツと変えてしまつては今までのユーザーが離れ、帰つて悪い結果を招きかねない。これだけは避けたい

「しいて言うなら若い女性層がうすいですわね……」

（そ うい え ば 今 日 い つ に な く 真 面 目 に 進 ん で る よ う な ……）

ベールはそう咳き、プランにそんな思いがよぎつた。その時――

「それだ――――!!」

「うわっ!?」

突然の叫びに社員は驚き、尻もちをついてしまう

それと裏腹に三人の女神はため息が漏れる。どうやら真面目な話
し合いはここまでようだ

「はあ、しようがないから聞いてあげるわ。どうしたのネプテューヌ
？」

ノワールの問いは誰が聞いても分かるぐらいの棒読みになつてい
た。気持ちが分からぬ訳でもないが……

「ちょっと、なんでそんな棒読みなのさ！」

「……そりやそうでしょ、あんたが口を開いてよくなつた試しがない
わ」

ノワールの言うとおりネプテューヌが口を開いて良くなつた記憶
は数えるほどしかない

「えー？ いい方向にしか行かないの間違いでしょ？」

「「・・・・・」」

しかも本人に自覚がないと来た。神様助けて……あ、こいつ女神
だった

「そんな事より打開策でしょ？ 私に完璧な考えがあるもんねー」

ネプテューヌはそういうながらえつへんと胸を張つてゐる

こいつはこつちが聞いてやるまで終わらないやつだ

ノワールとベールから聞いてやれといいたげな視線が送られて來
る。しようがなく代表して私が聞く

（分かつたわよ、私が聞けばいいんでしょ？）

「全く……一体どんな案だというの？」

「ふつぶーん、よく聞いてくれた。ブランよ」

（聞かせたのはどいつだと思つてんだ……）

思わず裏の口調が出てきそうだつたが心中だけになんとか押し
とどめる

「はつくんに手伝つてもらえばいいんだよ！」

「何を言つてるんですの？ ハクにはいつも手伝つてもらつてゐるでは
ありませんこと？」

ネプテューヌの言つてゐるはつくんというのはハクの事だ。ベー

ルの言うとおりハクには毎年この行事を手伝つてもらつていて

「違う違う、はつくんを裏方に回すんじゃなくてメインに出てもらうんだよ」

「はあっ!?」

ネプテューヌの意見に思わず声が出てしまった

「お前、バレンタインのイベントに男を出してどうすんだよ！」

企業側の考えには今年は裏方含め女性だけで固めようかという考え方があつたにも関わらず、裏方どころかメインに持つてくるとは何を言つているのだろうか

「……なるほどですわ」

「え？」

「ネプテューヌの案にしては中々ね……」

「おい、おい……」

驚いた事にノワールとベールまで領きを示している

もはや裏の口調が出てきていることなんか気付きもしない

「あいつなんかを出してどうすんだよ」

「ブラン、これはなかなか名案ですわよ。」

「は？」

「よろしいですこと？去年までの主な参加層はここですわ」

ベールは書類の中のグラフを指差す。その書類は参加者の男女別の年齢層に関してのものだ

指差したポイントは若い男性の層で他の層に比べ厚く見える

「チヨコを配るっていう企画だし、そうなるわ」

「違いますわ、この層だけ男女の差が激しいんですの」

ベールに言われ良くな見直してみるとこの若い層だけが他の層の男女比に比べ差が激しい

「つまりは若い女性の参加者が少ないってことよ」

「そうそう、だーかーらーこーではつくんの出番つてわけなのだ」

女性層が薄いのはわかつたのだがどうも話が見えてこない

首をかしげて いる私を見て良くなわかっていない事に気付いたのか 再びネプテューヌのドヤ顔が視界に入つてくる。イラつとくるがい

ちいぢれに付き合つていては身が持たない

「もーまだわかんないの？全く、幼児なのは体型だけにしてよー」

「た、体型なんざお前も一緒だらうが!!」

前言撤回、こいつの好きにさせてはならない…

「ふふーん、私は女神化すればそんな事ないもんね」

「な、ぐぐ…」

くつてかかつていこうとしたが、さも簡単にカウンターされてしま
う

ブランは悔しさか恥ずかしさか顔を赤く染める…いや、悔しさ
の方が大きい事は誰からの目でも明らかだ

「はあ、珍しく真面目なネプテューヌが来たのかと思つたらやつぱり
いつも通りね」

「なにさー！」

「やつぱり、ちょっと黙つときなさい」

「あ、ちょ・・・んー！」

ノワールはそう言うとネプテューヌの口にテープを貼り、どこから
取り出したのかロープで縛りあげてしまつた

・・・・一国の女神にそれいいのか

「ハクの人気を知つていまして？」

（あ、スルーなのね…）

「人気？」

「そうよ、ルウイー発信なのに把握してないの？」

（ハクの人気なんて気にした事なかつた…）

「ハクの人気なんて気にした事なかつた…つて顔ですわね」

「な、どうしてわk。いや、…それが？」

「まあ、いいですわ。これ、ご存じですかよね？」

そう言つてベールが出したのは雑誌だつた

特に詳しいという訳ではないが確かファッショングループ関係やその他各
国の流行だと乗つっている正に雑誌といえるものだつたはずだ

「ええ、つてこれリーンボックスだけで出てるものじゃないわよね」

「そう、ゲームギョウカイ全土にうつてるものですわ。そしてその雑

誌に・・・

ベールは雑誌のあるページを開く。そしてその中身を見て私は驚愕する

「な、なんだよこれえ!?」

ベールが開いたのその雑誌が主催する美男子コンテストの一次合格者のページだった

「これ、ハクよね?」

「あ、ああ・・・」

何人かの顔写真の中にハクのそつくりさん・・・いやハクが載つて

いる

ノワールの問いに私は頷く事しか出来ない

「私はてつきりブランがシェア獲得にハクを使い始めたのかと思つたのだけれど、違つたのね」

「――る・・・」

「え?」

「連れて来る!!」

「ちよ、ちよつと!?」

ブランはそう言い残し、目で追う事が困難な程の勢いでドアから出て行つてしまつた

「・・・想定外ですわ」

「ええ、ていうか今、女神化してなかつた?」

これはハクは無事にはここに来れないかもしけない・・・

その考えは一致しておりノワールとベールはここにはいない青年に合掌をささげた

「あのうすいません」

「ん、どうかしたの?」

先ほどまで目の前で起きた事件により空氣と化していた社員の女性が声をかける

正直、存在を忘れていたのは内緒だ

「すいません、私そろそろ時間で会社の方に戻らないといけなくなつ

てしまいまして」

彼女は申し訳なさそうに言つた

元々この集まりも女神達への報告が主で具体的な会議をやること
は予定外だった為、時間が来てしまったようだ

「大丈夫よ、後はこつちでやるわ。あと会社に戻つたら予定が変わる
かもしれないって言つておいてくれるとありがたいわ」

「は、はい承りました！」

「ありがとうございます、遅くなつてごめんなさい」

「いえ！大丈夫です。お先に失礼します」

そういうと彼女は荷物を持つて速足で帰つて行つた

大丈夫と言つていたがここまで長引かせてしまい若干申し訳なる。
まあこれからの方が長いのだが・・・

「これはブランが戻つてくるまで待つてないとダメね」

「ええ、まあブランの事ですから大して時間はかかりないと 思います
わ」

「そうね。・・・ そう言えば何か忘れているような」

「んー、んーー・・・」

「あ・・・」

完全に放置プレイをかまされていたネプテューヌであつた・・・メ
デタシ メデタシ

バレンタイン企画 中編 ゲームでも何でも最終目標を設定している時が一番楽しい

厳しい寒さもいくらかやわらぎ、降り積もった雪もだんだんと溶けだしている。とはいえたま日によつてはいくらかの寒さを残している2月中旬

ルウイー教会ではミナが忙しなく動き回っていた。忙しないのはいつもの事だが今日忙しいのはまた別の事によつてだつた

現在ルウイーでは各国の女神が来たるべきバレンタインデーの企画として毎年行つておるお祭りの打ち合わせをしている

そのため今日はブランが不在なのだ

とはいえ今日の為に徐々にだが今日の仕事が少なくなるよう調整しているのでそこまで大事には至つていな

「ふう・・・」

ミナは一つ息を吐く

調整のおかげでもう仕事の八割方が終わつてゐる。後はいつも通りの家事だけだ

——バタツ

突然扉が開く音が聞こえる

そう言えばそろそろブラン様達の打ち合わせが終わるころだ。ブラン様が帰つてきたのだろう

ミナは部屋の出口の方に行き、廊下を見に行く

「うつ、・・・あら?」

部屋の出口に近づくと急に風邪が吹き、顔をしかめる。その風も一瞬で風が止んだ後、廊下見てもブラン様はおろか人すらいなかつた確かに扉が開く音がしたのだが・・・

(風が扉を叩いたのかもれませんね・・・もう春なんですね、春一番ですか)

ミナはそう思い開いてしまつたであらう扉を閉めに行つた

——バタン

「ん？」

バタンといった音に顔あげ、思い出したように壁にかけてある時計を見る

「あ、もうこんな時間か。帰つて来たのかな？」

ハクは掛けていたメガネをはずし、机に置く

今日、ブラン達はバレンタインの・・・え、もう分かつてゐ?
まあかくかくしかじかで今いない、まあ時間的に今帰つて來たらし
いが

こつちもちようど書類を作り終えたところでプリントアウトを
待つている

机に置いてあるカップを手に取り飲もうとそのときだつた
——バーン!!

!?

大きな音と共にドアが勢いよく開いた。危うくカップを落としそ
うになる

「なんだ!?」

「——くう・・・」

そこにはブランがおり、何か呟いている

「ブ、ブラン?・・・」

「・・・」

「え、えと・・・おかえり? ず、ずいぶんとダイナミックなおかえりだ
ね・・・ハハハ」

今度は何も言わないブランに俺の額から汗が流れる、オカシイナー
ソンナアツクナインダケドナー

それになぜかブランは女神化している。ハクはありつたけの力で
脳をフル回転させる

(何に怒つてる! 何かしたか? あれか? ブランのプリンを・・・ってそ
んなことした記憶ねえよ!)

ありもしない記憶が頭を渦巻く、正直心当たりがあり過ぎてどれな
のかすら見当がつかない

「・・・ハク」

「は、はい!!」

「・・・来い」

「はい！・・・え？」

次の瞬間、部屋にいたはずの俺は空を泳いでおり、俺の部屋が遠くに見える。いつの間にかブランが自分の後ろにいて俺の首根っこを持つている

頭の整理が追いついていない、よく見れば部屋の窓が開いているのが見える。あそこから飛び出たというのか？いやいやそれより・・・「うわあああああ・・・」

ブランのスピードはとてももう一人を運んでいる事を考えている速さではない、だんだん気が遠くなつてくる

あ、スタッフホールが見えるよ。今まで見ててくれた人ありがとう、作者の次回作にご期待下さい・・・

「ハクさん、 入りますよ？」

ミナはそういうながらドアを開ける。ここはハクの部屋だ

どうやら風が強いで部屋を回って窓を閉めてきた。後はここだけだ、ハクが居るから一応言うだけと来たのだが中から返事がない
「ハクさん？」

ドアを開けるとハクの姿は無く、窓が開けられており、カーテンが激しくなびいていた

（どうしたんでしょう？）

その状況を不思議に思いながらも窓を閉め、プリントアウトされた書類を見つける

一応仕事は終わらせているらしい。ミナはそれを回収すると少々の疑問を抱きながらも部屋を後にした
先ほど起きた事になど気付くはずも無く・・・

「さあ、説明してもらおうかあ？」

「ブ、ブラン。これにはふか〜い訳が・・・」

何も言わず手元にハンマーを握るブラン。身体の水分が全部出てしまうのではないかというほどに背中に水分を感じる

救済のまなざしをネプテューヌ達に向けるが・・・

「まさかはつくんがアイドルになりたかったなんてね」

「女神の許可も無くそれはダメね」

「教会の立場も考えないとですわね」

三者三様の答えで首を左右に振られてしまう。

「・・・さあ覚悟はいいか?」

「ま、待つて、分かった。説明する、説明するから!」

もう土下座でもしようかという勢いだ

ブランもそれを察したのか武器を消してくれる。マジありがとうございます!

「この前の事だつたんだけど・・・」

時間は数日前にさかのぼる――

ハクは出版社にいた

「・・・ここはこんな感じで、こっちをここに持つてきます」

「なるほど、分かりました。問題ありませんね」

ハクとスーツを着た男性は資料を挟んで向かいあう形で話していった

何をしているのかというと雑誌でやる女神関連の企画についての

打ち合わせをやっていたのだ

つまりハクの向かい側にいるスーツの男性はこの企画の責任者で内容に関して話し合っていたというわけだ

「そうですか!じゃあ今度取材をするということです」

「分かりました。こちらで話はしておきますね」

「いや、助かります。場所は・・・おっと、すいません」

打ち合させていた途で彼のケータイの呼び出しがかかってくる

打ち合せ中とはいえ彼はこの中でも有数の敏腕の編集長で知られている。ここで受け持つ仕事も多数だろう

「いえ、大丈夫ですよ」

俺は承諾の意を表し、彼はすいませんと電話に出る

「デングエキコか、どうした？・・・」

(出版関係の仕事なんてどうしようかとおもつたけど、なんとかなつて良かつた・・・)

正直いうと女神関連の企画に関しての助言が欲しいなんて言われてきたものだからと身構えてきたがその心配は杞憂だつたようで内容はほぼほぼ完成しており最後の確認程度だつたので仕事という仕事も無かつた

「なにつ!?」

突然、電話で話していた編集長の声が部屋に響き渡る

「お前、急に辞退つて美男子コンテストはうちの目玉企画だぞ！毎回何百人つて来てんのに選出人数減らしたなんか言われたら苦情殺到だろうが!!」

美男子コンテストとはこの編集部が企画しているもので定期的に参加者を募集し、その中で最後の一人に選ばれるとモデルデビュー出来るという企画だ

数ある企画の中でも人気企画であまり詳しくないハクでも名前は聞いたことがある

「んな事言つてももう選考は終わっちゃつてるし、今から再選考じゃ間にあわねえ・・・あ！」
(ん?)

切羽詰まつた表情の編集長は俺を見て固まつてしまつた。どうしたのだろうか・・・
「取りあえず分かつた、俺の方で何とかする。——ああ、そつちは任せたぞ」

編集長は電話を切ると俺の前に座り、口を開いた

「・・・ハクさん

「は、はい？」

「モデルをやつてみませんか？」

「はいいいい!」

時間は戻り、場所は会議室。

「・・・つてわけだ」

「なるほどね、事情は分かつたわ。でもどうして私に言わないの」
話をしている間にブランも落ち着きは取り戻してくれたようで変身は解いている

「それは・・・」

珍しく口ごもるハクを見逃すほどブランは間抜けではない

「まだ何か隠すとはいひ度胸ね・・・」

ネプテューヌ達の方を見ても早く言つた方がいいといった視線を向けている

「そりや言おうとしたけど、ブランがなんか落ち込んでるみたいだつたし、一緒に寝てほしいとか言いだし・・・」

「だあああああ!!!」

ブランはすぐにハクの口をふさぐ。それと同時にタイミングの悪さを呪つた

(あの日かああああ!!)

「あれく、もう二人つてそんなとこまで行つてたんだあく」

「・・・早速、惚氣られたわね」

「わたくしたちよりもこんなに早く・・・ブラン、侮れませんわね」

「ちげえ!!行つてねえし、寝てねえ!!」

ブランはもう顔から蒸気が噴き出すのではないかというぐらいに顔を真つ赤にしている

ハクの方を睨めば、先ほどまでは一変、にやにやと笑つてているハクの言つてはいる日とはあの夜にミルクを飲んでいたあの日だ。言つてはいる事に間違はない、ないのだが・・・

ブランはあまりの恥ずかしさでテーブルに突つ伏した。ブラン撃

沈・・・

「はつくん、ほんとにそんなことヤつたの?」

「いや、冗談ですよ。それよりネプテューヌさんその字体はまざいです・・・」

非常にまざい、レーティング的に・・・

「まあ、一応ピンチヒッターって事で掲載だけしてその後の審査で落ちたって事にするからと言われたんですけどね」

「なるほどね、でもネットじゃどうして落ちたんだとか色々言われてたわね」

「ははは・・・」

ノワールの言葉にハクは苦笑を浮かべるしかない

「でもちよどよかつたですわ」

「どういう事ですか？」

「実は頼みみたい事があるんですね」

それからハクはノワール達に先ほどまでの話をされた。ブランも復活してくれたようだがまだ顔が若干赤く、俺を睨んでくる。正直言つてかわいい

「つまり、僕もブラン達側に居て配ってくれつて事ですか？」

「そう言う事になるわね。無理にとは言わないけどどうかしら」

ハクは少し考え込む、確かに役に立てるのは嬉しいのだが、秘書である自分が女神達と同じステージに立つというのもどうなのかなと思ってしまう

その様子を見かねたのがブランがくちを開く

「・・・別に大丈夫、ハクが出てきたところで私たちのシェアが落ちる訳ではないわ。それより客足が減ってきている方が問題」

「分かりました。ブランもそう言つてるし協力させてもらいますよ」

「さつすが、はつくん！デキる男は違うね」

（ダメだ、ネプテューヌさんが言うとどうしても引っかかる・・・）

・・・何はともあれなんとか話はまとまり、時間も時間だったのでネプテューヌ達には教会に泊まつてもらう事になつた

「なんか教会の方騒がしくないか？」

「確かに・・・何か問題が発生したのでしょうか」

教会に近づいていくと何故か辺りが騒がしい。数年前であれば自己以外女神がその国を歩いていればそんな騒ぎになつていただろうがもうそんな時代も終わり、この光景にも何ら不思議はない

それにこの騒ぎの中心は違う所にあるような・・・

「ミナ、どうかしたの？」

教会に戻り、入口にいたミナにブランは声をかけた

「ああ、ブラン様に皆様！大変です。ハクさんが急に消えて……」

「え？ はつくんはここにいるよ」

「……ええ？ ハクさんいつの間に……協会中どこを探してもいません

んし、守衛の方に聞いても見ていないといわれていたのですが……」

「……」

この後ネプテューヌ達によつて事情を説明されたミナは事態の收拾に追われ、ブランとハクはミナにこつぴどく説教されたのだった

バレンタイン企画 後編　甘いのはチヨコが故？それとも・・・

——バレンタインデー当日

「いや～今年も来たなあ」

ハクはだいぶ低くなつた日に照らされていた
辺りにはスタッフが会場づくりに勤しむ姿が見える。開始の時刻
まであと1時間程度といったところだ

いつもこの風景を見ていると今年もやつてきたなという思いが浮
かぶ。いや今年は少し違うか・・・

「・・・ここか」

ハクの視線の先には昨年までは無かつた物が出来ている

ここはハクが配る場所で今まで層の薄かつた若い女性層がターゲットであり、その方々向けにデザインされる予定らしい

今年はブラン達とは離れて行う事なつて正直言つて不安しないが何も完全に自分ひとりという訳ではないしやるしかない

「ハクさーん！」

会場づくりをしている奥から自分のことを呼んでいる声が聞こえ
る

「最後の打ち合わせするんでお願ひします！」

「分かりましたー！今行きます」

ハクはそう返し、舞台の方へ歩を進めた

「結構来てるわね・・・」

ブランは舞台のそでからちよこんと顔を出し、辺りの様子を見る
会場へと入つて行く人々はブランが想像してたよりも多い、少なくとも昨年よりは人の波が厚い気がする

「何ビビつてるのよ、こんなもん氣にするほどでもないわ」

「・・・もう少し足を震わさないで言えれば完璧だつたんだけど」

ノワールが声をかけてくるがどうも説得力を伴わない。いつもの

事だが

「あれへ、二人とも緊張してるねー」

「まあそれも仕方がないですね、どうやら昨年にも増して参加者も増加しているみたいですからね」

「はつくんさままだね！」

ネプテューヌの言葉にはつとして周りを見るがハクの姿は見えない

「あら？ ハクは別の場所ですわよ」

「あ、そう・・・」

ハクが準備しているのは別の場所らしい。べ、別にさびしいとかそういううんじやねえぞ！ 一人で大丈夫かとか・・そう、『心配』してやつてんだ！

「おお、アツアツだねー。これじゃあチヨコが溶けちゃうよお」「うるせえええええ！」

「わあ！ 待ちなさいよブラン、今ここで暴れないで！」

「そうですわ、こんなところで！」

今にも殴りかかるうとするブランをノワールとベールが抑える
「放せ、こいつは許さねえ！！」

抑えられながら叫ぶブランの声がテント内に響き渡る

「ん？ 今ブランの声が・・・」

いや、テント外にも漏れていたようだ・・・

「ハクさん、どうされました？」

「ああ、いや何でもないです。ちよつと前の恐怖がよみがえつただけですから」

ハクの脳裏には正座させられ怒られた数日前の出来事が浮かぶ。
それをきいたスタッフは首をかしげる

「？、それよりそろそろ始めますよ。大丈夫ですか？」

「はい！ 大丈夫です」

「OKです、じゃあここから。どうぞ！」

ハクはテントから外に出る。それと同時に周りの光景に驚いた
「おわあ・・・」

見渡す限り人、人、人。さすが四力国女神が全員集まるとなればここまでなるか

だがよく見れば昨年より増えているような感じも受ける。わずかとはいえ自分も貢献できているならば嬉しい限りだ

パチパチという拍手と時折黄色い歓声が聞こえてくる

「よ、よしやるぞ……」

ガチガチに緊張しつつも一人ひとりへ配つて行く

「いつもありがとうございます。は、ハッピーバレンタイン……」

初めてなんだ、ぎこちないのは温かい目で頼む……

そんな感じも最初のうちだけで持ち前の慣れの早さで終わるころにはとても初めてとは思えないほどに出来ていて

チョコを渡して喜ばれる。この事をとてもうれしく感じる。今考えるとこんな仕事を日頃からしている女神達を少し羨ましく思う「いつもありがとうございます。ハッピーバレンタイン！」

「・・・お、応援します！」

「え？あ、はい。ありがとうございます」

最後の頃には笑顔で渡すことが出来た

渡した人が一瞬フリーズし、応援してますというのだが一体何を応援しているのだろう。教会の仕事・・・とか？

少々の疑問を持ちながらも何とか終了を迎えることが出来た

後処理とかはスタッフの人達がやってくれるそうなので挨拶をしてからブランド合流する為、メインのブースがあつた所へ向かついた

挨拶を行つたときに聞いたのだがぱつと見た感じ去年より動員数は多いだらうとの事だつた

もちろん正確に計算したわけでもないので確実な事は言えないが大成功ですよと企画管理者の興奮ぶりは印象的だつた

そんな興奮していた管理の人の話を聞いていたので少し遅くなつてしまつた。ブランドの方はもう終わつているだらう
「ちょっと遅くなつちゃつたな、急がないと」

ハクは小走りでブランの方に向かつて行つた

「はあ・・・」

春が時折、顔を出すとはいえたままだ寒さが残つてゐる2月後半の夜は寒く、吐いた息が白く裝飾される

さすがに毎年やつてゐるだけあって、こちらには特に問題も起きず順調に配り終える事が出来た

しかしそんな順調さとは裏腹に内心ではブランはハクを心配していた

初めてこれをやつた時の記憶がよみがえつた、色々苦労した記憶だ。あのときは女神四人でやつていたがそれをハクは一人でやらなくてはいけないのだ

まあハクであれば大丈夫だと思つてゐるがやはり不安はぬぐいきれないといったところだ

だがそんな心配は杞憂でスタッフからは大成功ですよとの事だった

今はハクを待つてゐる。時間がかかつてゐるようで予定より少し遅れている

他の女神はといふとハクへのチヨコを私に渡すと先に帰つてしまつた

直接渡せばいいだろうと言うと「邪魔しちゃ悪いからさ」だそうだ・・・

自分が持つてきたバッグの中を見る

ネプテューヌ達のチヨコの下に自分のチヨコが入つてゐる。私が

ハクに渡す為に作つてきしたものだ

「くう・・・

見るだけで若干顔に熱が集まる

「な何、緊張してんだ。そう、これはお疲れさまって事で渡すんだからな・・・

「何渡すんだ?」

「うわっ!」

突然した声に顔をあげるとハクが立っていた

「きゅ、急に出てくんじゃねえ！びっくりすんだろ!!」

「いやいや、気付いてないみたいだから声をかけようかと思つたら急にしゃべりだしたから。そう『言えばネプテューヌさんたちは？』

「ネプテューヌ達は先に帰つた。それとはい、これ」

そう言つてブランはチョコを差し出す

「ん？これ、チョコ？」

「そう、ネプテューヌ達から渡しといてつて」

「あ、本当に？そうか、やつた！」

みんなからのチョコに喜ぶハクを見てブランは少し機嫌が悪くなる

「・・・随分と嬉しそうね」

「そりや、義理チョコでももらえれば嬉しいんだよ。せつかくだし帰りながら食べるか」

「そ、そう・・・。あの」

「ん、どうした？」

「いや・・・何でもない」

チョコを加えたハクがこちらに振り向く、ハクの顔を見ていると急に恥ずかしくなり自分のチョコが上手く渡せない・・・

そのまま二人はネプテューヌ達からもらったチョコを食べながら帰つていた

もうだいぶ歩いてきた。ここからであれば教会が既に見えてきている

(な、何やつてんだ！時間たつほど渡しずれえだらうが!!)

脳内でもう一人の自分が私を叱責しているが行動に移せず、ただ焦りが増すだけだった

もうおいしいであろうチョコレートの味がよくわからない・・・
もうやるしかない！

「は、ハク！」

「はい・・・つてなに？」

あまりに意を決し過ぎたのか呼ばれたハクは反射的に背筋を伸ばし返事をする

「お、お前に……こ、これやる」

ブランはバツクから取り出したチヨコをハクに差し出す

「これって……まさか、ブランの？」

「……そうだ」

もう顔から火が出そなくらいあつい、もはや口調など気にしてられない

「ありがとう!!いやあマジで嬉しいよ!」

「そ、そう」

渡せた事の安堵とお礼の恥ずかしさがおり混ざりもう何が何だか分からない……

「食べてもいい?」

ハクの問いには声を出せず、こくつと頷く

「ん……。うん、うまい!俺好みだな」

「そ、そう……」

ハクのストレートな物言いに赤面にも拍車がかかる。全くこいつに恥じらいとかはないのか

「うん、チヨコレートの箱の裏にまだなんか……これが?」

ハクはそういうながらはこの中に入っているという何かを取り出す。おや、なにか付けた覚えは無いのだが……

「は!!これは……」

「私、なにか付けた覚えはないんだけど?」

「い、いやあ……これは……」

急にハクの返答の歯切れが悪くなる。怪しい……

「何がついていたの?見せなさい!」

「あ、ああ……」

隙を見てハクの手元に入つてたカード?を抜き取る

「なんだこれえ!!」

抜き取つたそのカードのような物はカードではなく写真だった。それも先ほどのブランの写真だ

裏を見ればネプテューヌの字で・・・

『やつぱりはつくんにはこれだよね！』という事でこれあげるよ！ b

『ネプテューヌ（△ ③）＝☆』

「…………あのやろお、次あつたら……」

ブランに握られたその写真は氷漬けにされ粉々に散っていく
「ああ……」

ハクが散つて行く残念そうにする

「……そんなにあの写真が欲しいのかよ」「え？」

「わ、私が居るんだからい、いいだろ……」

（わああああ!!何言つてんだああ!!）

「ブラン……」

「いや！今のは何でもない！」

全く、私は何を言つているんだろう。言つたのは自分で間違いない
んだが、とても自分の考へでいつたように感じない。まるで誰かに口
を操られているような

「よつと……」

「うわっ！」

突然、視界揺れ動く。床を踏んでいたはずの足も宙を舞う……つ
てこれは

理解するまで少し時間がかかったが私は今ハクに抱えられている。
所謂お姫様だつこだ

「お、おい！」

「いやあ、俺チヨコだけじや足らないかなー」

「え……？」

「あれ、こんなどこにおいしそうなお姫様が居るな」

やめさせようとするがハクの芯を貫くような目に何も言えず、目を
閉じてただただ顔を赤くする事しか出来ない

「ブラン？」

名前を呼ばれ目をあければ、月明かりに照らされたハクの顔がすぐ近く近い

「・・・な、なに」

「ふつ、顔真っ赤」

「・・・当たり前だろうが」

ブランはそこまで言うと目を閉じる。それを見たハクも目を閉じて口づけをする

「ゞちとうさま」

「・・・うるせえ」

月明かりが二人の事を包んでいく。この瞬間がまるで永遠に続く

かのように・・・

バドミントンをバドつて略すと一部の人間にしか通じないよね

あなたが幸せな時間はいつですか？

家族や友達、恋人といふ時間、好きな事をしている時間……人それぞれ、色々と思われる事でしょう

あ、どうも申し遅れました。わたくしルウイー教会でブランの専属秘書を務めております、細氷ハクという者です。どうせ名字とか忘れてたでしょ？

えーコホン、それは置いときまして。えと何だつたつけ……あ、そういう幸せな時間の話ですね

前者であげた物も素晴らしいと思います。ですが私の場合はばぱり睡眠ですね！

人間として生まれながらに持つてゐる欲求、それを満たしてゐる時こそ正に至福の時といえるでしょう

そう、私はまさに幸せに包まれてゐるのです。夢を見る事のない、深い睡眠いわゆるノンレム睡眠です

休日の惰眠を貪つてゐるわけである。もうベッドと一体化してゐる気分だ

——ああ申し訳ない、こつちも限界が近いみたいですね。今回はここまで、さよ・・う・・な・・らあ・・・・・

ハクは再び睡魔の海へと身を沈める。おいそこ、どつかでこの流れ見た事あるなあとかいうな

ダツダツダツダ——

教会の廊下を駆けるピンクとブルーの影、ラムとロムの朝は早い……

ある日は怒られて逃げたり、またある日はやつぱり怒られて逃げたりと幾度となく走り抜けた廊下

だがいつも逃げるだけではない。今日はある場所へ向かっていた

「ここよ！ロムちゃん」

「うん！」

ロムとラムはある部屋の前で立ち止まる。その扉にはハクという文字、つまりはハクの部屋だ

二人は扉バーンとをあける。が深い眠りについてばかりのハクは動じず未だ睡眠という名の海を回遊中だ

「お兄ちゃん、寝てる……」

ロムはハクの姿を見て、頬を膨らませる

「むー……あ、そうだ！ロムちゃん」

「んーなに？」

同様に頬を膨らませていたラムだつたが何か思いついたのか一瞬で表情が明るくなりロムに耳打ちする

「えー、ラムちゃん、危ないよ……」

「大丈夫、大丈夫。ほら見てて」

ラムは本棚の本のないところを登つて行く

「ほら、大丈夫だよ。ロムちゃんもいけるよ」

「う、うん。分かった」

ロムもラムの説得に折れ、しぶしぶ本棚を登る

「……よいしょ」

「ね？大丈夫でしょ」

「うん♪」

「……いや、十分楽しんでいる

「じゃあ、いくよ！」

「うん！」

「せーの！」

二人は掛け声と同時に本棚を蹴る

ロムとラムの身体は本棚を離れ、ちょうどハクの寝ているベッドの上まで来る

そこで勢いを失った二人の身体はそのまま重力に従い……寝てい るハクへと吸い込まれた

「ぐああつ!?

思わず強襲に見舞われたハクの口から自分の声とは思えない声が
出る

思わず目を見開き、今圧倒的に足りない情報の取得を試みるが寝起きの脳には大分ハードな仕事だ

開かれたままのドア、本棚から落ちたのであろう何冊かの本。そして目の前に広がる俺の上に乗った双子の笑顔・・・

「やつと起きたわ、ハク」

「おはよう、お兄ちゃん」

「・・・・・おはよ」

全てが分かつた・・・分かつてしまつた・・・

ともかく二人をベッドから降ろし、ハクもベッドから出る。クローゼットを空け、着替えながら口ムラムの話を聞く事にした

「はあ・・・んで今日はどうしたの?」

「暇!!」

起こつた惨劇は分かつた。それからどうしてこのような事になつたのかの経緯を聞こうとすればそれは至極単純な回答が返つてくる
(暇つて、それでこんな仕打ちを・・・)

「やることが無くて暇なの!」

ラムの言葉にロムもうんうんと首を縦に振る

「お得意のいたずらは?」

「いたずらはいつも同じ。つまらない」

どうやら一番の被害者ブランも飽きられたらしい

「うーん、じゃあ何かやりたい事は?」

逆に聞いてみると二人も首を傾けて悩んでいる。

これは困った。暇なのにやりたい事が無い、これではこっちが何をされるか分かつたものではない

これは一刻も早く何か手を。と考えたところでピカーンとハクの

頭の上電球が明かりを灯した

「じゃあ、俺と楽しい事をしよう!」

「たのしいこと?」

「一人は首をかしげているが、やるとなつたらこうはしていられない。急がなくてはつ!」

「そう、楽しい事。俺は準備してくるから庭で待つてて」

ハクはそう言うと部屋を出てある場所へと向かつた――

それから10分後、庭で待つていたロムとラムの元に形の異なる二つのバッグを背負つたハクが現れた

「遅い!!ハク!」

「ごめんごめん、ちよつと色々と準備するものがあつてさ」

「お兄ちゃんそれ、何?」

ロムがハクの背負つていたバッグを指差して、そう言う

「これはね・・・じゃーん!」

「ラケット?」

バッグを開けると中には三本のラケットと何かの筒が入つっていた
小さい子であつてもしっかりと握れるグリップ、細いフレーム構造
が大きさの割の軽さを実現している

つまりはバドミントン用のラケットだ。ちなみにさつきの筒は
シャトルが入つている

「そ、バドミントンのラケットだよ。んでもつてこれが・・・よいしょつ
と」

「おお!」

続けてハクが取り出したのは簡易ネット、それを広げるとちょうど
1コート分のネットの大きさになる

ハクの言つていた楽しい事というのは正にこのバドミントンの事
だつた。遊びといったらいたずらかゲームだつた二人の事を考え
ば外で身体を動かすというのも必要だ

ちなみにミナさんとブランにも話はしてある。ブランに至つては
安心して小説を書ける!といつになく張り切つていたが・・・
「よーし、準備いいか?」

「おつけーい！」

「だいじょうぶ！」

ネットの向こう側の二人が返事をする。こちらはシングルス、あつちはダブルスといった感じで行う

「じゃあ、いくぞー。よつ！」

シャトルを空中に投げ、コルクの部分を打ちぬく。シャトルは放物線を描き一人の方へ飛んでいく

「ラムちゃん、お願ひい」

「おつけ、ほい！」

前に構えていたロムの頭上を越えたシャトルをラムが正確に打ち返してくる

こちらへと向かってくるシャトルは先ほどのハクのショットと同じ放物線を描く。普段は活発なラムだがこのショットはそんな性格とは逆に慎重で正確なショットだ

「お、やるなあ。よつ！」

「油断、だめ」

ロムのそんな言葉と同時にシャトルがネット近くにおとされる。ロムが飛び上がり、ハクの打つたシャトルを浅く打つたのだ

「うおー！くつ、おりや」

すかさずハクは前へと手を伸ばし打ち返す

「お兄ちゃん、さすが」

「そつちこそだよ・・・」

どうやらロムも同様に慎重な性格と逆にプレーでは攻撃的なスタイルになるらしい

こちらのショットを正確に返してくるラムとのストロークをしていれば、時折飛び出してくるロムがこちらのペースを巧みに乱していく

こちらも何とか対応しているがさすがいつでも一緒の双子だけあつて連携は完璧だ。こちらも油断ができない

始めてからお互に点を稼ぎ、試合も終盤へと向かっている。徐々

にではあるが圧されている感が否めない

はじめこそ二人にしてはネットが高く大丈夫かと心配していたが、そんな心配はするだけ無駄だつたようだ

「よし！いいよ追い詰めてる！」

「うん、ナイスラムちゃん！」

結構なラリーになつてゐるがラムもだんだんと前に上がつてきており、こちらは防戦一方になりつつある。徐々にバドミントンの勝ちパターンにはめられていく

ポイントもアドバンテージを取られてしまい、二人の勝ちまで後一点となつてしまつた。これでは心配するどころかこれでは負かされてしまうだろう

「これで、どうだ！」

逆転の一手とラムへ割りと鋭いショットを打つが・・・

「チャンス！」

「うつ！」

ネットからの高さをさげようものならすかさずロムが手をだしてくる

なんとか上げる事に成功するが前に寄つてきているラムへのチャンスボールになつてしまい、強く打ち返される。だんだんとハクの位置が下がつてくる。これでは・・・

「ロムちゃん、チャンス！」

「うん！」

守備を固める為、ネットから下がつて打つていたのが仇となつた。ロムが最初にいた位置より少し下がつてている事に気付かなかつた

ロムはハクの上げた球はゆつくりと落下し、その真下にはロム。俗にいうスマッシュの構えだ

ハクはラケットを構える。が、ロムのショットは意標をついたものだ

ロムのスマッシュの構えから繰り出されたのはネット付近に落ちる球。ドロップだつた

(いつそんなの覚えたんだあああ)

心の中で叫びながらネットの近く、シャトルの落下地点へ全力で飛ぶ。間に合え!!

なんとか落下するより早くラケットをシャトルの下へ滑り込ませることが出来た。あとは・・・と上を見ると二人が既にネット際まで詰めていた

どることが出来なければ俺の負け、仮にぎりぎり取れてもこの二人のチャンスボールとなり、次の一打で勝敗が決してしまう。油断はおろか隙も無い

・・・だが絶体絶命の時ほど燃えるものだ

「お、りや!!」

ハクはシャトルを出来る限り奥へ上へ打ちあげた、二人のはるか頭上へ

「あ！」

ロムとラムの連携はかなり強力だつた。そうつまりは強力すぎたのだ・・・

二人は連携を取りすぎた結果、動きが段々と似てきていた。そしてこの場面では同じ位置にいて並んでしまっていた、その為今後ろには誰もいない、前にいる二人の高さを超えてしまえばこっちの勝ちだ
「よし！」

ハクはうつぶせのままだが勝利を確信した。一人ではあの高さは届かない、試合はまだ終わらせないという意志を見せつけたのだ
・・・だがあまりに立ち過ぎたフラグが回収されないなんて事は無かつた

「ロムちゃん！」

「うん！」

二人は声を掛け合うと二人ともジャンプした。だが当然ながらシャトルには届かない

そこでロムをラムが肩車するように体勢を変え、ラケットを振るう・・・

「いつけーー！」

振るわれたラケットはシャトルを見事に打ち返す。うつぶせのま

まのハクに返されたシャトルを打つことなど出来ずシャトルはハクのコートに落下した

勝敗は決した。口ムとラムはハイタッチをし、喜んでいる
負けこそはしたが喜んでもらえたようでなによりだ

「いやー、二人とも強いよ！」

「もつちろん！」

「ぶい」

二人はこちらにピースを向けている

「あ、そうだ。ハク！」

「ん？ どうした？」

「ハク負けたから罰ゲームね！」

ハクは突然告げられた内容に数秒フリーズする
「…………え!? そんなの言つてなかつたよな!?!」

「負けたら罰ゲーム、これ絶対」

苦し紛れの反論も口ムに切り捨てられる

勝つてから公表する新ルール・・・憎いぜ

「・・・なるほど、それでこうなつてるわけね」

「そう言う事らしい」

後ろから聞こえるブランの声に返事を返す

場所は変わり、ハクはリビングにいた。あれから片付けをし、昼食をとつた後にここで罰ゲームを受けているところだった

その最中に執筆活動を中断させたブランが来たので、経緯を説明していたのである

「・・・で、とても罰ゲームには見えないのだけれど」

「それは俺も思つた・・・」

ソファに座るハクは下を見ながら苦笑する。そこには座っている自分の上に座りながらすやすやと眠る一人の姿があつた

試しにブランが口ムの頬を突いてみると口ムはむにやむにやと口元をくすぐつたそうに動かすだけだ

「起きる様子はないわね」

「まあかなり激しくやつてたから疲れたんだろうな」

罰ゲームははじめ、ハクがソファになる事だつたらしいがどうやらベッドに変わつたらしい

睡眠の素晴らしさを知つてゐるハクが二人を起こせるはずも無く。ブランに救済の目を送つてみるが・・・

「私は一人がおとなしくしてゐるうちに作業を進めるわ」

「ああ・・・」

そう言つてブランは立ち去つてしまつた・・・酷いよブラン・・・伸ばした手がブランを掴むことなどできず、空を掴む
「どうしたものかなあ・・・」

なんとなく視点を下に移せば悔しいほどに熟睡してゐる二人が居る

「ふあ〜、何だか見てるこっちが眠くなつてきたよ」

考えてみれば疲れているのは彼女たちだけではない
身体をソファに完全に預ける事にした。動けないつてのも意外に辛いんだな

昼食の片づけを済ませたミナはお茶を淹れて一息つく事にした

「ふう・・・」

見渡すとソファに座つてゐるのであるうハクの後ろ姿が見えた
「あら?」

声をかけようと近づくとそこにはソファで寝てゐる3人が居た
午前中、庭で遊んでいたようだがどうやらその後眠つてしまつたようだ

「結局寝るのね・・・」

ブランも戻つてきており、3人を見てそういうつた

「あ、ブラン様。作業はもういいのですか?」

「ええ、取りあえず考えてたところまでは書けたし、私も休憩しないと」

「それでしたらお茶をお入れしましようか?」

「お茶・・・そうね、そうするわ」

「分かりました。用意しますね」

ブランとミナは気持ちよさそうに眠っている3人を見てからお茶を準備している隣のダイニングへと向かつた

ホワイトデー企画 上げといて落としてもつかいあげる、もう高低差で耳鳴りが

「ここはこうしてこつちはこんな感じでつていつた方がいいと思う」「りよーかい、……おけ、じゃそうするわ。助かった」

現在、ハクはブランの部屋へ来ていた。ルウイーの建設案についての書類があつたので守護女神のブランの意見を聞く為だ

「いやあ、悪いな。わざわざ見てもらつちゃつて」

「気にしないで、元々は私の仕事だから」

「そう言つてくれると助かる。じゃ俺戻るな」

そういうと部屋のドアへと振り返り、歩き出す。ハクに「残り頑張つて」と言えば「お互いにな」と返してくる。このやり取りももう幾度となくやつてきた、おたがいに信頼のおけるパートナーと言えるだろう

「あ」

突如ドアに向かつていた足を止め、何かに気付いたような声を上げハクは振り返る。ブランは何事かと首をかしげる

「そーいやさ、聞きたいんだけど……」

「ん? どうしたの……?」

珍しくハクが歯切れの悪そうに言葉を発する。どちらかというと普段からハキハキとしているタイプのハクがこうしているのは珍しい。何かよほど重大なミスでもやらかしたのだろうか……

「あ、今、俺がなんかやらかしたかとか考えてたろ」

「……そんな事は考えてないわ、ところで聞きたい事つて何?」

思わず心の中を読まれたような事を言われ驚いたがすんでのところでなんとか平常を装う事に成功した。ハクにバレていなかは知らないが……当の本人はまだ怪訝そうな顔でこちらを見ている

「まあいいけど……んで今度の休みつて暇か?」

「……」

「ちよつと買い物に付き合つて欲しいんだ、昼はおこるけど……無理か？」

ブランは顔を下に向けて何も言つてくれない。そんなブランをハクは不安そうに見ていて。どうしたものかと心配しているとブランが顔を上げた

「いいわ。ちようどその日はたいした予定は入つていなかつたし」

「本当か!?

「ええ、その買い物なら付き合うわ」

ハクはてつきり断られるかと思つていたので思わぬ承諾に喜ぶ。取りあえず聞きたい用事はすんだので「今度の休み、よろしくな」といつてハクは自室へと戻つて行つた

「はあ……」

ハクが出て行つたのを確認したブランは深く息を吐きながら投げるようにボフッとベッドに身体を預ける。クツシヨンの合間から見える顔は熟れたトマトのように真つ赤に染め上がつていた

今度の休みというのはホワイトデー直前というわけだ。そんな日に買い物の誘いとくればその買い物がホワイトデー関係で無い訳がない。思わぬデートの誘いにブランの心臓は少々しんぱいな程はげしく打ちならされている。ハクの誘いにどうにかこうにか表情を崩さず返事をする事が出来たがいつ顔がとろけてもおかしくは無かつた。

ブランは身を起こし、両手で顔をパンパンと叩いて顔を引きしめてから仕事へと戻つて行つた。その時バーンと部屋の扉が開く

「じゃーん!! 見て見てお姉ちゃん!」

「見て見て！」

恒例といわんばかりにラムとロムが入つてくる。彼女らの手にはブラン作の同人誌、しかも、丁寧に二人の落書き付き。他のみんなが仕事で二人で遊ぶのに飽きた双子達はいつものように仕事中のブランの部屋へ突撃しに来たというわけだ

ブランは二人から本を受け取り、黙る。ロムとラムは目を輝かせてそのブランの様子を見ている。普段おとなしいブランが怒り、追いか

けまわされるというのを楽しんでいるのだ。・・・・・だが

「ええ、よく書いているわ」

ブランは笑顔で二人を褒める。反対にロムとラムの二人は想定外の返答に驚愕の表情を浮かべる

「あ、あれ？おねえちゃん、この本おねえちゃんのだよね？」

ラムは怒らないの？と言わんばかりにブランを確かめる、ロムも驚きながらではあるがうんうんとうなずいている。だがそれでもブランの態度は変わらなかつた。むしろこれは他にもいっぱいあるから構わないと言つてゐる。少し前に同様の理由でロムラムにかみなりが落ちていただけに今日の姉の発言に驚きを隠せない

「み、ミナちやーーん!!!」

二人はそんなブランの態度に強い違和感を感じ、叫びながら部屋を出て行つた。当のブランはとくにそんな二人をどうしたのかとは思いながらも上機嫌で仕事へ戻つて行つた

突然いなくなつた二人を探してゐると走つて戻つてくる二人が見える。そのまま二人はミナへと飛び込んでい来る。廊下は走つてはいけませんと注意しようするが二人の目が涙でうるんでいた

「ど、どうされたんですか？」

さすがに注意することが出来ず、事情を聞くが突然の事なのでミナも少々焦る

「おねえちゃんが・・・・・

「・・・・・おかしくなつた！」

二人の言葉にミナの困惑はさらに深くなつていくだけであつた・・・・・

——休み当日

「なあ、ブラン？」

「・・・・・」

ブランは無視をするようにそっぽを向いてゐる。ハクはこちらの機嫌を伺つてゐるがブランの態度にガクリと肩を落とす。買い物も

終わり今はお昼を取つてゐるところだ。治らないブランの機嫌にハクは頭を悩ませてゐる。その理由とは今日の朝までさかのぼる……

ショッピングモールについた二人は中を歩いていた。ブランとしては行き先は聞いていないのでただついてきたような形になつてゐる。とはいえたートである事に変わりはない、その事実ににやけそうになる顔を抑えてハクに声をかける

「どうでこに何を買いに来たの？」

「あ、そういうば言つてなかつたな、一応クツキー辺りかなうつて思つてるんだけど……」

「え……？」

「いやあ、ブランが来てくれて助かつたよ。ネプテューヌさん達にもらつてたしホワイトデーにどんな渡したらいいかなつて思つてたからさ」

「……」

これが事の発端だつた……

——回想終了

「ブラン、めんつて俺がなんかしたなら謝るからさ」

ハクは顔の前で両手を合わせてゐる。確かに自分が勝手に思い込んでいた事ではあるのだがそれまでだと言つて納得させるほど自分は大人ではなかつたらしい

「じゃ、じゃあ今度は私の用事に付き合えば許してあげなくもないわ……」

とはいえ少々の罪悪感を覚えないほど非情にも慣れない訳で妥協案を出す事にした。ハクは私の用事という事で首をかしげてゐるが頷いてくれた

「……じゃあ行くわよ」

「わっ、ちょ、ブラン!?」

私はハクの手を掴み、席を立たせてから無理やり引っ張つて行く。私がハクを引っ張る形になつてゐるため赤面した顔をハクに見られる事は無いが、その一部始終を見ていた店員たちから生温かい視線を

向けられた

「お、おいブランどこに行くんだ？」

「・・・・・着いた」

「え?!はやっ!!えーと・・・本屋?」

「そう」

ハクを引っ張ってきたのは先ほどまでいた所の隣にある書店だった。ブランは颯爽と入つて行く、ハクもそれに続き、慌てながらも中に入つて行く。入口近くにはファッショングラ雑誌やら週刊誌などの入れ替えの激しい本が置いてある、ちなみにハクが載った例のコンテスト企画の物も最新号が売り場の中央に置いてある。

だがブランはそんな物には目もくれず奥へとどんどんと進んで行く。ハクも黙つてついて行くとお客様も少なくなり、本棚には様々な本がもう一冊も入らないといった様子で収められている。ブランはその整理をしていた一人の店員に声をかけていた

「お疲れ様、いつも仕事熱心ね」

「あ、いらっしゃ・・・つとブラン様でしたか」

長い黒髪の女性でこの書店の制服なのであろうエプロンをしてい
る、書店特有の静けさと相まっておとなしそうな印象を受ける女性
だ。どうやら会話から察するにブランとは知り合いらしい、今まで気
付かなかつたが本好きのブランの事だ、実は常連なのかもしれない
「今日もお使いになられますか?」

「ええ、お願ひ。あともう一人いいかしら」

「もう一人・・・・あ、かしこまりました」

ブランの言葉で少し離れた所にいたハクに気付いたらしく、柔軟な
笑顔で会釈される。そのあとで「ブラン様を隅におけませんねえ」と
ブランに小声で言っているが完全に聞こえている。いや隠す気も無
いようだ

「う、うるさいわね、いいからはやく鍵を渡して」

「はいはい、分かつてますよ。どうぞごゆっくり」

その店員はブランをいじつて楽しんでいるようだ。・・・俺と同じ
匂いがする。その店員はブランに鍵を渡すとまた違う本棚へ移つて

行つた

「ほら行くわよ」

ブランはこちらに声をかけてから奥の通路にある部屋にはいつて
いつたので後を追いかけ中に入つた

「おお・・・」

中に入つたハクは思わず軽くため息を吐いた。落胆のため息ではない、感嘆のため息だ。6畳ほどの部屋にテレビとソファがおいてあり、冷蔵庫やらテレビなど生活家電などもある。驚く事にもう一つの扉にはシャワールームまである。・・・下手したら人一人住めるぞこれ

「私の隠れ家よ、たまにここにきてるわ」

「いやいや、ここ本屋だろ？何でこんなところにこんな部屋が」

「私がこここの店長に言つて用意してもらつたのよ。こここの事はミナも知らないわ」

「すごいな・・・」

職務乱用な気がしなくもないが、どつちにしろこんな場所があるとは知らなかつた。ブランはソファに座るとリモコンを操作しテレビが動き出す。画面は再生の待機画面になつており、ブランはこつちを見ている。ここに座れと言う事らしい

「全く・・・映画が見たいなら最初からそう言えればいいのに」

「・・・うるさいわよ」

「はいはい・・・つとそうだ」

ブランに促されるままソファに座る途中で、ハクはある事を思い出し持つっていた紙袋の中を探る。ブランは不思議そうにこつちを見ている

「えと・・・あつた。はい、これ」

中から何かを取りだしたハクはそれをブランに渡す。中身は飴のようで透明の袋に一つ一つ入つており、またそれが同じく透明の箱に入つてゐる為、さまざま色でカラフルな飴が光に反射してキラキラと輝いている。箱にはリボンが巻かれており贈り物用という事が分かる

「あ、きれい……」

「だろ？この前見つけたんだよ。バレンタインのお返しにぴつたりだ
と思つたからさ」

「え……」

「いやいや、ブランにもバレンタインもらつたしこれはそのお返し」

「あ……その……あ、ありがとう……」

ブランが顔を真っ赤にさせお礼を言つて いる様をハクは実に満足
そうに見てい る。それがこの上なく腹立たしい……

「ああ、もう！いいから映画見るぞ!!」

「えく、照れてるブラン見てるのも楽しいんだけどな！」

「うつせえ!!画面はあつちだ、こつちみるなあ!!」

おまけ プンプン？（？、～、～）？ゞ（・。・。）ナデナデ

——後日、プラネテユース

「ネプテューヌさん、バレンタインありがとうございました。これそ
のにお返しです」

「お、さつすがはつくん、このクッキー美味しいんだよ。わかってるね
く、あれを入れといった甲斐があつたつてもんだよ！」

「はい、今後ともよろしくお願ひします」

ネプテューヌとハクはお互いに黒い笑みを浮かべる。何か最近流
行の白い粉でも取引して そ うだが何の事はない、取引して いるのはブ
ランの隠し撮り写真だ。しかし今日は本人が斜め後ろで目を光らせ
て いるので今日は無い

今日はホワイトデーとい う事で各国の女神達にホワイトデーのお
返しを渡しまわつて いる訳だ。最後のネプテューヌに渡したのであ
とは帰るだけになつた。先ほど言つたようにブランも一緒に来てく
れ て いる

「あ、ハクさんいらっしゃつてたんですね」

「イストワールさん、お久しぶりです」

ネプテューヌとの（怪しい）会話を して いるところに気付いたよ

うで奥からイストワールが出てきた

「はい、お久しぶりです。あ、ちょうど良かつた。ルウェイー教会との件で確認してもらいたい物がすこしあるのですが・・・」

「あ、了解です。ブラン、悪いちょっと待つてて」

「分かったわ」

ハクはイストワールと奥へ入つて行つた。どうやら少し待つ事になりそうだ。ブランがソファに腰を下ろすとネプギアがお茶を持つてやつてきた

「お、さすがネプギア。気が効くね！」

「ありがとう、いたただくわ」

「いえいえ、ゆっくりしていつてください」

お茶を置くとネプギアも腰を下ろした。どうしてこのネプテューヌの妹がこうも姉と正反対に気のきくネプギアなのか、永遠の謎である

「気が効くと言えばはつくんもさすがだね」「はつくんさんがどうしたの？お姉ちゃん」

突如思い出したようにネプテューヌが呟く、ネプギアも気になつたようで何があつたのか聞いている

「今これ、はつくんからもらつたんだ。ホワイトデーのお返しだつてさ」

「あ、クッキー」

「そうそう、クッキー。実はねホワイトデーのお返しには何をあげるかでしつかりと意味があるんだよ」

ブランはネプギアに出してもらつたお茶を飲みながらネプ姉妹の会話を聞いていた。ネプテューヌは仕事だとか全くしない癖してなぜかこういうどうでもいい事は知つているのだ。ネプギアも初めて聞いたようで興味を示していた

「確かに、クッキーが『友達として好きです』とかで、マシュマロが『私はあなたが嫌いです』で・・・」

へえそんな物があるのかと聞き流していた。どうもホワイトデーだからと言つて白いマシュマロを。と渡すと大変な事になるらしい

「んで、キヤンディが『恋人として好きです』って意味らしいよ！」

「ブフツ!? ゴホッ!! ゴホッ!!」

完全に気を抜いていた為、思わずふいいうちに飲んでいたお茶を盛大に吹き出し、咳き込む。ネプ姉妹も突然の事にびっくりしていた

「うわっ!! どうしたのブラン!!」

「大丈夫ですか!? ブランさん」

「ええ、大丈夫。ゴホッゴホ・・・」

ネプギアからタオルを借り、顔を拭く。何とか落ち着いたがさつきのせいでお茶が気管に入ったようで咳き込む

「一体どうしたの? あ、もしかしてお茶うまく飲めない系女子?」

「・・・どんな女子よ。大丈夫、大したことないわ」

どうやらあの野郎はとんでもない置き土産を置いてつたようだ。ブランは今ここにいない誰かさんを顔を真っ赤にしながら恨んだ・・・

消したい過去・・・

謎の手紙

――『革命』

この言葉に何を感じるだろうか。

下剋上、進化、向上・・・そんな感情が上がつてこないだろうか
・・・だが忘れてはならない。どんな革命にも敗者が存在し、流された血、涙があるということを。

「はあああくうううううう!!!」

ブランの大きな怒声とともに朝の空に輝くハクという名の一点の星

『ああ、今日も一日が始まったなあ』という声が職員の端々から聞こえてくる。

まさに朝の恒例行事といったところだろうか

「あ、お姉ちゃん、おはよう」

「お姉ちゃん、おはよう」

「おはようラム、ロム」

ブランは自分の部屋へとやつてきたラムとロムに何事もなかつた

ように朝の挨拶を済ます

「あれ、ハクお兄ちゃんは?」

「ああ、ハクなら・・・」

「おう、おはようロム」

「あ、ハクお兄ちゃん。おはよう」

「はや!」

さつき吹つ飛んだばかりでしょと言いたげなラムとは裏腹にロムはいつの間にか戻つてきていたハクと朝の挨拶をしている

一方ブランは特に驚くこともなく、ミナのいるダイニングへと向かい。そのあとをロムとラムの二人を抱えたハクがついて歩く。

そう、なんということはない、いつもの日常。そんな日常に小さな、本当に小さなノイズが紛れ込もうとしているのであった。

「はあ、今日も寒いですね‥」

朝の恒例行事?から少し前、ミナは教会に何か届け物などがないかを確認しに教会の入り口にあるポストに向かっていた

確認とはいってもそんなに毎日、毎日届け物が届くわけではないが、それでも2、3日に一回は教会に向けた匿名の要望や感謝の手紙やらが届くのでミナがこうして毎朝見に来てるというわけだ

だがルゥイーの朝ともなればさすがのミナでも平氣とはいかないで足早に確認を済ませようとポストを開ける

「?」

中に入っていたのは封筒、一見は何の変哲もない普通の封筒だ。差出人は書いておらず、宛先には「細氷ハク様」という文字だけ

どうしようかと思つたが受取人でもない私ではどうしようもないし、それよりなにより寒い。怪しさは満載だが不審なものは見当たらぬのでとりあえずは本人に渡すべきだろう

そう考えていると後ろの方からブラン様の怒声とハクさんの叫び声が聞こえてきた。どうやら当の本人に渡すには時間がかかりそうだ

そんなことを考え、クスリと笑いながらミナは足早に教会の中へと入つていった

「「「（ダ）ちそ（うさ）までしたー！」」

揃つた三人の声が食卓の締めくくりを行う。こうして見ていると自分なんかよりも兄妹なんじやないかと錯覚しそうになる

だがそれが悲しいとか妬ましいとかという感情は一切ない。もはや見慣れた風景、そこに安心感を感じている自分がいるのだ。うらやましいとか別におもつてねえからな!

自分で自分を突っ込んでどうすんだとどうでもいいことを考えて

いるとミナから声が上がる

「あ、そういうえばハクさん。ハクさん宛てにお手紙が来てましたよ?」「手紙ですか?」

「はい、これですね」

ハクはミナから何が、封筒だろうか?それを受け取る。手紙と言つているがその割にはあまりにも無機質だ

「手紙? 封筒にはなんにも書いてないですね」

ハクも同じことを思つたようで不思議そうにその謎の便りを眺めている

「切手もないですし直接入れに来たんでしょうか?まあ珍しくはないですが」

「あ、確かに」

とりあえずは開けるしかないと判断した上でハクは封筒を開けていく。ラムとロムは「なになに?」と興味津々といった様子で中を覗こうとハクによじ登つている。ラブレター?とのラムの発言にビクッと反応してしまつた自分がとてつもなく悔しい…

「んー? なーんだいたずらだなこりや」

「えー、いたずらー?」

「ざんねん」

ハクはそのままその紙をくしゃくしゃにしてゴミ箱へ捨てる

「それより、ハク! 昨日のリベンジよ!」

「今度はまけない!」

「お、やるか? いいだろう。よしじやあ昨日の続きだ!」

そのまま三人はラムとロムの部屋へと向かつていつた。だがブランドの視線はその三人ではなく、別のところへと向いていた。

「どうやら私の心配損だつたみたいですね」

「… どうかしらね」

「はい?」

ミナから疑問の視線が送られるが、構わず先ほどハクが投げ捨てた

ゴミ箱へと近づき、中からくしゃくしゃになつた手紙を取り出す

「それはいたずらだつたんじや?」

「いや…まあ、本当にいたずらなら私たちが見ても問題ないわ」

「はあ…」

そういうとブランはその紙を開く。そしてまず見えてきた文字は…

「… フエンリル」

その単語は一瞬にしてこの部屋の空気を変えた。ミナも疑問を浮かべていた表情から引き締まつたものに一瞬で変わった

「いたずら… なんでしょうか」

「わからない、でももしそうならだいぶの物好きね。特に宛名をハクにしている辺りがね」

「で、でもあの団体はもうつぶれたらんじや…」

「まあね、でも本当につぶれたかなんて確かめようもないし、なんともいえないところね」

ミナとブランに沈黙が訪れる。今ミナはあの時を思い出しているんだろうか…

「でも、こんなもん送つてきてるからにはいたずらで済ますつもりはな
いわ」

だがブランが動搖することはない、もちろん驚きがなかつたわけではないがやることは決まっている。

すべてはあの時… そう、あそこからすべてが始まったのだ…

コラボ企画番外編「俺も超一流秘書になりたかった

」

「ふうん、ブランちゃんをおとす方法…」

「そうなんですよ」

開幕早々怪しい会話をしている二人。アイリスとハク
薄暗い部屋で一つのテーブルを囲み、まさに密会（むしろ見つかっ
たら殺される）を繰り広げていた。

アイリスが魔法関係の書物を探してルウェイー教会に訪れた際、ハク
から少し相談に乗って欲しいと言われ、現在に至る。

正直、国の運営のことだと仕事関係のことなら私じゃなくてトウ
力をと思ったのだがこれは…楽しくなりそうだ♪

「俺からのラブコールは降り注いでるんですけどどうにも反応が芳し
くないんですよね…」

「芳しくないっていうのは？」

中から湧きあがってくるニヤニヤをなんとか抑えながら真剣に（を
裝つて）話を進めていく

「うーん、なんていうか怒られたりとかそっぽ向かれて無視されたり
とかですかね〜」

「具体的にどういうことしてるのかしら」

アイリスはさらに話を進め、まずは具体的な行動を聞いていく。こ

れがツンデレのツンなのかを見極めねばならない

「そうですねえ、朝起きてこないから添い寝したりとか…」

「がはつ！」

「あ、アイリスさん!?なんていきなり血を！」

「…甘い!! 甘すぎるわ！ こんなのことちの話にはなかつたわよ!?」

「ちよつとそのメタ発言は…」

「そんなこと言つてられないわ！ うちの煉獄姫に文句言つてくる!!」

「ちよつとお!?」

・・・しばらくおまちください・・・

「…さあ、さつきの続きをね」

「いや何事もなかつたかのようにかえつて来たけどすゞ」こととしてま
すからね!」

「気に入ら負けよ」

「…はい」(この人にツツコミは無理だ)

何かを察したハクは、アイリスにおとなしく従う

「そしてハク、ブランちゃんを落とす方法よね?」

「はい」

「それは…」

「それは?」

アイリスの溜めにハクも同調する

「襲いなさい!」

「襲う!? マジですか?」

「マジもマジ! おおマジよ」

二人の会話はどんどんとあらぬ方向へと進んでいく

「でも具体的にはどうすれば?」

「そうね、この経験豊富な私に任せなさい」

「おお! さすがです!」

あらぬ方向へ進んで言つた二人の会話は留まることを知らない

「いい? まずはタイミングよ」

「タイミング:なるほど」

感心してゐる場合かというツツコミをするものは残念ながらいない

…というわけでもなかつたようで

「だまれ」

「うぎや!?」

アイリスさんに突き刺さる分厚い剣、そしてその後ろに伸びる黒い
影。

「あ、トウカさん」

「ああ、ハクか」

「お疲れ様です。ところで… これは?」

ハクは悲惨なことになつてゐるアイリスを指してトウカに尋ねる

「ハク、気にするな…いいか、これはただのオブジェクトだ。」

「あ、はい」

「なに…人のことを…オブジェクトとか…言つてんのよ…」

「うるさい、それに何が経験豊富だ。経験なんざ俺しかないだろうが…」

「ちよ、それは言わないやk」

「だまれ」

トウカはそのままアイリスを投げ飛ばし、そして何事もなかつたかのようにハクのほうへ向き直る

ツツコミたい部分がそれはもう大量にあつたのだがトウカの目が何も聞くなど訴えていたのでここはトウカの意思を汲むことにしよう。

「そりいえば、トウカさんがここに来るなんて珍しいですね」

「まあな、プラネテューヌの仕事はネプテューヌにやらせてる」

「え、それって大丈夫なんですか」

「まあネプギアもイストワールもいる。大丈夫…なはずだ」

トウカの発言に少々の動搖があつたことは彼の精神衛生上だまつておこう。

「アイリスが何かやらかすんじゃないかと警戒してきてみたんだが…来て正解だつたみたいだな」

「ははは…」

確かに下ネタの話に持つて行つたのはアイリスだが話のきつかけを作つたのはハク自身でもあるため苦笑いを浮かべることしかできなかつた。

何か話題を変えなくてはと想えていたところでハクはトウカに聞きたいことがあつたのを思い出した

「そりいえば、トウカさんに聞きたいことがあつたんですけど…ん、聞きたいこと…か」

「いやいや、そんな怪しいことじやないですって。えーとまあつまりは、どうしたら保護者になれますか?」

ハクの質問にトウカは少し考える動作をする。トウカといえば普

ラネテユースの秘書、巷では女神パープルハートの保護者として有名だ。

トウカとは同じ秘書ではあるが彼の仕事にはハクには到底真似できないほどの仕事量と質が含まれていた。

仕事をしないことで有名なネブテユースさんも秘書でありながらあれほどの仕事をこなすには何か秘訣があるはずだ。教えてもらえるかはわからないが何かのプラスになるはずだ

そう、決してブランの保護者になりたいなどという不純な動機ではない…決して…

「そうだな…特に意識したことはないが、睡眠をとらないことだな」「は…？」

そんな心配は杞憂だつたようで何も包み隠さず答えてくれた。その内容がハクのためになるかどうかは別だが。

「寝ないようについてことですか？」

「ああそれが理想だが寝ないというのは集中力の低下を招き、処理速度を遅らせる原因になりかねないからな。さすがそれは無理だ」

「あ、ああ。そうですよね！さすがに寝ないっていうの無理がありますよね」

「20分だな」

「はい？」

「20分寝ればとりあえず大丈夫だろう」

「いやいや、トウカいつもどれぐらい寝てるんですか!?」

「寝れたら30分、まあ1週間くらいなら寝なくとももんだいないだろう」

「…」（あ、人間じゃないやつだわ…）

あわよくばトウカの仕事の秘訣を自分も取り入れることができればという淡い期待は儘く散つていった。

そうしてアイリスの助言に従つたハクは永遠の眠りについたとき。メデタシメデタシ

（過去編）反女神組織『フエンリル』

時間はさかのぼり半年ほど前……各国の女神が結束し太古の女神を退けることに成功したゲイムギョウ界は平和に包まれていた。と思われていた。

わーわーと騒がしい声やら物音が教会中に響き渡っている何か祭りごとをやつてるわけではない。むしろあまり歓迎できる内容ではないのだ。

自分の机に積まれている書類にため息をつかざるをえない

あのタリの女神の撃退以後、各国でシェアの上昇がみられた。タリの女神の襲撃を撃退したのは現女神並びに女神候補生の面々ということは広く周知されており、それがシェアの向上につながったのだろうとラステイションの神宮寺ケイ言っていた。

ケイ曰く、女神個人の力ではなく全女神の協力してでの結果ということが広く国民に受け入れられているらしい。

どちらにせよ世界は平和になつたといえるだろう。いや……「なつた」というのは少し語弊があるか。しいて言うならば平和に「限りなく近づいた」というべきか……

そう、タリの女神の撃退によつてすべての問題が解決したわけではないのだ。

ブランは積まれた書類の中から一枚を取り出した。そしてその書類の内容に先ほどまで動かしていた手が止まる。

「フエンリル……」

自分で発したこの言葉が自分に重くのしかかってくる。

反女神組織「フエンリル」……これが現在のルウェイーが抱える大きな問題。そしてそれこそがブランの悩みの種の正体だ

タリの女神を撃退したあの事件からフエンリルは動き始めた。

そこだけを切り取ればなぜ?と言えるタイミングだ。

女神のシェアが上昇傾向にあるこの状況で行動を開始する必要な

んてあるのか？

女神のシェア上昇に焦つて行動を起こしているだけではないのか
？

普通はそうなる。女神の停滞期にこういった組織が生まれ対処に苦労すると言うのはよくある話だ

ほとんどの人間がこういった行動を起こすのではあれば後者を選ぶだろう。であればシェアの急激な上昇に焦つただけの時代遅れ組織なのだと…

…そう、その認識が甘かつた

結果から言えばフェンリルは今のところゲイムギョウ界の中でも最大の反女神組織となっていた。

あの女神絶頂期とも言える時期からなぜだという戸惑いが当時の教会中から感じられた

フェンリル側の主張としては女神支配の脱却。ここまででは今までの反女神組織となんら変わらない。しかし彼らには具体的な根拠が存在していた。

「ゲイムギョウ界を襲つたタリの女神も『女神』だという事を忘れてはいけない。」

その言葉を聞いた時、一瞬心臓が止まつたかと思った

「太古の女神がこうして現代に現れこうした襲撃を行なつた。」

「今の女神がこの先の未来こうならない保証がどこにあるのだ」

今の

完全に盲点だつた。フェンリルはシェアの上昇に焦つて出てきたわけではない。活動時期が遅れてしまつているわけでもなかつた。彼らはこの時を待つていたのだ…

なんでこんな時期に活動を起こしたのだ。という油断がフェンリルの活動を認識するまでを遅らせ、国民が身をもつて体感した恐怖で皆を煽り、反女神思想を国民に植え付ける

側から聞いたらデータラメな内容であつても実例がこうも最近現れたのだ。説得力が段違いだ。

エディンの時のように大規模な洗脳があるわけではないのであれ

ほどの爆発力は無いにしろこのじわじわと迫つてくるこの感じはとても不快だ

ブランは手元の資料の内容に目を通す。

始末書と書かれた内容を見て、またさらに頭痛がひどくなつた気がする

以前、フエンリルの活動が活発になつてきた当初、教会の軍がブランの指示を待たずにフエンリルに押し入つたことがあつた。

もちろんルウェイーでは言論の自由が認められているし、女神の事を悪く言つたからといって軍が動くわけではない。だがルウェイーを崩壊させかねないフエンリルをこのまま野放しにするのもそれはそれで成長を助長しているのではないかと意見もある。いわゆるグレーゾーンと言うやつだ。

そして最終判断はブランに委ねられ、軍がブランの判断を待たずに強行突入したというわけだ。

しかしブランが驚愕したのはそのことにではなかつた
フエンリルに突入した軍が見るも無残に大敗したのだ、それもたつた一人にだ。

報告では突入したところに待ち構えられた仮面をかぶつた何者かに全員がやられ、気がついたときにはもぬけの殻だつたとされている

突入すらできていないまさに門前払いと言うやつだ。

軍の連中はアホだがそんな甘い鍛え方はしていない。国家を背負つてゐる重みと言うのは計り知れない。それほどまでの部隊をたつたひとりで潰すということはどういう意味を持つてゐるかもはや考えなくともわかる

女神と同等か、それでなくとも限りなく近い。フエンリルが後も急成長した影にはこういった人物があつたのかとより警戒心を強くする。

ブランはひどい頭痛の原因であるこの書類に憎しみやら腹立たしさやらを込め、印を押す

そこで「そういえば」と先程の書類の二枚目をめくり、ある名前を

見つける。

——ダイヤモンドダスト

ダイヤモンドダスト。これが居合わせた隊員の一人が言っていた
なぞのマスクの名前らしい。聞くからにコードネームのようだが今
のところ個人を特定する唯一の情報だ

まさに謎、謎、謎だ。名前以外大してわかっていることがない。た
だ今後フェンリルを対処するにあたって大きな壁になることは間違
いない

ふうーと大きく息を吐き、背もたれにより掛かる。色々な問題があ
るが一刻も早い対応が必要になつてくる。時間経過は相手の有利に
しかならない

こうしてゐる間にも相手は次の手を…

「ブラン様！」

そう考へてゐると突然自室のドアが勢い良く開き、珍しく焦つた声
をあげるミナが現れる

どうやら次の手を警戒するなんてことをしてゐる場合ではなかつ
たようだ…

クリスマス（に出す予定だつた）企画♪プレゼントはサプライズより一緒に買いに行く派です♪

——クリスマス

それはキリストの降誕を祝う日とされており、また年に一度サンタクロースがこの一年いい子にしていた子供たちにご褒美としてプレゼントをくれるという子供たちには誕生日の次にうれしい記念日である。

家族で食卓を囲み祝つたり、最近は恋人と過ごしたりと。多種多様な楽しみ方が存在する行事だ

しかし、そんな楽しい楽しいクリスマスを迎えるためにはブランには越えなければならない壁があつた。：

「…ン、：ラン。ブラン！」

「あ…」

ノワールの声によつてブランは現実へと引き戻される。しつかりとノワールに視線を合わせるとだいぶ私を呼んでいたようでご立腹のご様子だ

「ちよつと、聞いてるの？」

「ごめんなさい、全く聞いてなかつたわ」

「あのねえ…」

あまりにもあつさりしたブランの返答にノワールの怒る気も失せてしまつたようだ

そう、現在は第何回だが覚えていないが女神会議の真つ最中なのだ。まあ名前こそ女神会議だのもつともらしい名前になつてゐるがふたを開けてみれば女神四人が集まつて駄弁つてゐるだけのただのガールズトークに過ぎないのだが

「でもいくらノワールの話でもブランが話を聞いてないのは珍しいね！」

「確かに珍しいですわね…」

「ちよつと!? それどういう意味よ！」

ノワールがすかさずツッコミを入れるが誰もそれを気にしない。
まあいつものことだが……

「気にしてないで、ちょっと考え方してただけだから」

「考え方……ああなるほどですわ」

「な、何？」

「何をつてその珍しくブランが考えこんでしまう、原因が」

「えー！ ベール分かつたの？ 私にも教えてよ！」

「… 私、泣いてもいいかしら」

若干一名涙腺崩壊しそうだが気にしているほど暇ではない。ごめんなさいノワール……

「この時期を考えてみればわかることですわ」

「時期つて言つても… んー12月の終盤？」

「そう、その年最後に残つた一大行事。クリスマスですわ」

「うつ…」

ベールの発言に思わず顔をしかめる。相変わらずベールの推理力は高い… 無駄に

「え？ クリスマスつて言つてももう大幅に過ぎて… んつー!!」

「何をしてるの、ネプテューヌ」

「ふはっ！ なんか誰か急に口を塞がれて。は！ これが作者の見えざる手！」

「メタイ事言つてるんじゃないわよ…」

… その横でよくわからない発言をしている奴がいるが気にした
ら負けだ

「ともかくクリスマスと言つたらプレゼントですわ。つまりハクに渡すプレゼントを悩んでいる、そう読めましたわ！」

「おお！ さすがベール！ 伊達にそういうゲームやりこんでないね！」

「当たり前ですわ！」

「ベール、あなたも否定しないのね…」

「… そうよ、悪い？」

少し腹立つが変に否定して面倒くさいことになるのは目に見えて
いるし、隠す理由もないでの肯定する。

「いえ、そんなことはないですわ。それよりもわたくしたちがその悩みを解決する手伝いをして差し上げますわ！」

「え？」

しかし帰ってきた言葉は意外なものだつた

「そうだよ、女神のよしみだし！」

「そうね、いくら女神とはいえ困っている人を見捨てるようじや女神の名が廃るわ」

この女神たちに相談するとなると正直癪だがこういうものは自分以外の視点を取り入れるといいというし、この一瞬の恥ずかしさをどうにかすることによつてこの悩みを解決できるとすれば儲けものだ

「わかつたわ、じゃあ相談させてもらうわ。ありがとう…」

「うん！私たちに任せて！大船に乗つたつもりで待つててよ！」

「ええ」

そういうと3人は相談を始めてくれる。恋愛ゲームやらその手のゲームでも経験豊富なベルに加え、何かと波長が似てるネプテューヌもいる。ノワールは…どちらにせよ一人で考え込むよりは全然、答えに近づけているがする。私も聞いているだけでなく参加しなくては…

「ねえ！私の扱いだけひどくない!?」

…いや、やはり気にしたら負けだ

——数十分後

私はいま、クリスマスのプレゼントを考えるという目標からずいぶんと遠ざかり目の前の惨劇をどう捉えたらしいのかという思考に切り替わっていた。

え？何があつたつて？…それは目の前で繰り広げられている議論を聞いてもらえればわかるだろう

「やっぱり、猫耳は外せないよね！」

「だつたら猫っぽいコスプレも必要ね」

「じゃあもつと露出を多くして…」

さあ、おわかりいただけただろうか？

こうなつてしまつたことの発展はノワールの一言からだつた。時間は少しさかのぼり相談が始まつたところ――

『ところで、こういうのを渡そうとかそういう案はなにかあるの？』
『いや、まだ何も決まってない。何か喜んでもらえそうなものがいいんだけど』

『そうね、だつたらハクが好きなものがいいんじやない？何かハクの好物とか気に入つてるものとかないの？』

ここまでは比較的当然の会話、しかしそれがまずかつたと氣付くまでには随分と遅かつた

『はつくんの好きなものか… ブランしか思いつかないな！』

『それですわ!!』

『『え？』』

『そうですわ、ハクの好きなものがブランならブラン自身をプレゼントしてしまえばいいのですわ！』

『いや、でもそれはさすがに無理じや…』

『そんなことないですわよブラン！主人公に思いを寄せるヒロインが大胆な行動として自分をプレゼントとしてプレゼントする。恋愛ゲームの王道パターンですわ!!』

『おおくさすが！ベール、心得てるね〜』

『それならそれなりの衣装が必要ね！』

――そして私は考えるのやめた…

時間は戻り、現在へ

「二人ともまだまだですわ」

「え、なにベールはもつといいものあるの？」

「ええもちろん、確かに二人の猫コスはいい案ですわ。しかしあれが足りてないですわ」

「あれってなによ？」

「あれ… それはこれ！『首輪』ですわ！」

「おお！」

ベールがどこからか取り出した（本当にどこから取り出したん

だ・・・）何かペツト用のものだろうか、首輪をかざす。そしてその姿に
ブラン以外の二人は歎声を上げる

「相手への服従を示すこれは私はあなたのものですという意思を主張
するとともに相手の支配欲を搔き立てるピツタリなアイテムですわ
！」

このように『プレゼントは私よ大作戦』の作戦会議は留まるところ
を知らず、どんどんヒートアップしてくる。会話の内容を把握するこ
とを脳が否定をしているこの状況ではどんな方向に進んでいるかよ
くわからないが、たつた一つのことだけはわかつた。

——私の淡いわずかな希望は音もなく盛大に散つていったとい
うことだけは……

「なるほど、それでネプテューヌさんよりも早くブラン様がプラネ
テューヌ教会に来いらつしやるわけなんですね」

「…ええ」

机に突つ伏しながら蚊の鳴くような声で返事をするブランにイス
トワールは苦笑を浮かべる

先ほどの作戦会議から誰にも気づかれることなく抜け出してきた
ブランは今、プラネテューヌ教会に来ていた。

「それは何というか、お姉ちゃんがすいませんでした」

ブランが突つ伏した机にネプギアは謝りながらお茶を出す。

「気にならないでネプギア。・・・ 今に始まつたことじやないわ」

ネプギアには今のブランにネプテューヌたちが今何をしているか
を聞ける勇気はなかつた。いや聞かずともわかるが・・・

「ははは・・・」

ネプギアも苦笑を浮かべるしかなかつた。

ブランは重々しく起き上がりとネプギアにお礼を言つてから出さ
れたお茶を飲む。それを確認したイストワールはブランに話を切り
出した

「とりあえず状況はわかつたんですがところでなぜプラネットユース教会へ？」

イストワールの尋ねたそれは確かにネプギアの疑問でもあった。来るなとは言わないがなぜ来たんだろうというのは当然ながら出てきてしまう疑問ではある。

（ま、まさかお姉ちゃんのクレーム!!ど、ど、ど、どうしよう!?た、確かにお姉ちゃんへのクレームが今までなかつたつていえれば嘘とか、むしろ多かつたっていうか…）

あらぬ心配によつて冷や汗をかきまくつているネプギアをよそにブランはイストワールを指す

「イストワール、あなたよ」

「はい？」

「あなたの意見を聞かせて」

「わ、わたしですか？」

（はあ、よかつた…）

一人安堵している横ではイストワールがまさか自分に聞かれると思つていなかつたのだろう、突然の指名に珍しく慌てている。

「ええ、あなたならハクの好きそうなものわかるかと思つて」「なるほど…」

イストワールはそうつぶやくと少し考え込む。ゲームギョウカイ随一の知識量を有する彼女であつてもさすがに『好きなもの』という不確定要素を導き出すのは至難の業だろうか

「そうですね…それを調べるには三日…」と言いかけた時のブランの顔が泣きそうな潤んだ目をしていたのでその先まで言えなかつたさてどうしたものかとイストワールはまた考え込む。正直先ほどのブランの顔がかわいいと思つてしまつたのは内緒だ…ん？

「ブラン様」

「どう…何か思い当たるものはあつた？」

「はい、たつた一つだけ。いやむしろこの一つしか見当がつきません」「本当?それは一体…」

そこまで言うとイストワール大きく息を吸い、また吐く。それをブ

ランは固唾をのんで見守っている。

「ハクさんの好きなものそれはやつぱりブラン様じやないですか？」
　　イストワールの発言にネプギア、ブラン両名は固まる。

「イストワール…あなたもそう答えるのね…」

「はい、ただ何もブラン様を直接プレゼントにとは言いません。何かしてあげるつてのでいいんじゃないですか？」

ブランの頭に？が浮かび始める

「それはそうと実際に何をすればいいの？」

「そうですね。いつそのこと聞いちやえればいいんじゃないでしょうか？何もサプライズである必要なんてないですから。むしろそつちの方が喜んでもらえたりとかもありますよ」

「なるほどね」

するとブランは少し考え込むような動作をすると椅子から立ち上がる

「ありがとう、イストワールあなたのおかげで少し楽になつた気がするわ」

「いえいえ、私は当たり前のことと言つたにすぎませんから」

イストワールの言葉にフフッとほほ笑む

「そういうことにしておいてあげるわ。後ネプギアもお茶あります、おいしかったわ」

「あ、ありがとうございます。もう行くんですか？」

「ええ、もう大丈夫よ。お邪魔したわ、ネプテューヌによろしく」

ブランはそういうと教会の屋上で女神化しルウイーの方角へと飛びたつていった。

「いーすんさん、あれでよかつたんでしょうか？」

「はい、おそらくは問題ないです。」

そうですかと相槌を打つ。それよりもネプギアには気になることがあった

「それよりはつくんさんの好きなものこんな短い時間で分かつたんですね。いつもだと三日間とかだつたりしますけど」

「いえ、今回は特に調べてません。でもおそらく今回は調べても調べ

なくても結果は同じだつたと思ひますが」

「なるほど、まあ確かにそうですね。」

確かに考えてみれば一番好きなものがブランであることに変わりないんだろう。

仲睦まじいというかうらやましいというか…：

空を飛んでいると空気が冷たくなるのがわかる。この温度の変化こそルウイーの証だ

そのまま教会の屋上へと降り立つとどこから現れたのかハクが待っていた。

「あ、お帰り、ブラン」

「ただいま、なんでハクがここにいるの」

「いや?なんとなくブランが帰つてきそうな気がしたから」

ハクの発言に少しあきれる。気がするぐらいでここまで来ないでしょと言いたい。だがそれが無駄だというのはもう十分わかつている

「そういうえばこつちはもう終わつたよ」

「本当、ご苦労様。もしかしたら私待ち?」

「まあね、さ、ラムとロムが首を長くして待つてるよ」

「そう、じゃあ早くしないとミナが大変ね」

ブランとハクは足早にラムとロムそしてもうすでに手遅れかもしれないがミナも待つてダイニングへと向かつていった。

そしてクリスマスパーティーも終わり、ラムとロムを寝かしつけることに成功した後、ハクとブランはプレゼントの配置を行つていた。

サンタさんがと言つてなかなか寝付かなかつたが何とか寝てくれたのだ起こすまいを早々に設置を終え、ブランの部屋へと引き上げる。

「ふう、何とか今年も終わつたね」

「ええ、ここが毎年緊張するわ。それとケーキおいしかつたわお疲れ

様」

クリスマスのケーキはハクが作つていてラムとロム好評なので毎年作つてもらつていて。ハクが作れるんだからクリスマスじゃなくてもいいじやんとねだられるらしいがケーキだけは特別なのでクリスマスにということにしているらしい

「そう、よかつた。」

そう微笑み返してくるハクの顔をみて緊張が高まつてくる。いうタイミングとしてはここしかない

「ねえ、ハク」

「ん？」

「…何かしてほしいことない？」

あまりの緊張でハクを見ずに少し下の方を見ながら言うことしかできない。自分からじやわからないうが、おそらく顔もびっくりするぐらい熱いのでおそらく真っ赤になつていることだろう

「…は？」

「いやー！クリスマスのプレゼントつて何がいいのかわからなかつたら何かしてあげた方がいいかなって！」

ハクが驚きすぎて口を開けたままフリーズしてたのでつい口調が変わつてしまつていてが今のブランにそれを気にすることができるほど余裕はなかつた

「ああ、そういうことか。いやあ急に下向いて顔真っ赤で何してほしいとかいうからまさかと…」

「ちがうわ！」

ブランの声が夜中に響き渡りそうになつたがすんでのところでブランが気を持ち直したので大事には至らなかつた

「そうかしてほしいことか？」

ハクは少し考え込むとすぐに顔を上げてブランに問いかける

「それつて俺がしたいことしてもいいってこと？」

「？まあハクがそれでいいなら」

「おつけー♪じやあこつちきて」

「こつち？」

ハクは今胡坐をかいてクツショソの上に座っているわけだがハクがさしているのは胡坐をかいたおなかの前、つまりは胡坐をかいた上に座れということなのだろう

さすがにはずかしすぎるるので辞退しようかと思つたがここまで言つてしまつた手前、引くに引けない。もうどうにでもなれといった感じで言われたようにハクの上に座る

ブランとハクではそれなりに身長さがあるためブランが座るすっぽり収まるような感じになる。ちょうどどの位置にあるためブランの頭の上にハクの頭が乗つかる

「なんかブラン暖かいね」

「… うるせえ」

正直こんな状態、顔が真っ赤なのは確認しなくともわかる。

「お、またなんかあつたかくなつた気がする」

「… 暴れるぞ」

「じょーだん、じょーだん」

そんなこんなで騒いでいたらいつのまにか寝てしまい、翌朝この状態でミナさんに発見され、ミナさんにあらぬ疑いをかけられてしまつたのはまた別のお話…